

「モンタペルティ現象」試論

米 山 喜 晟

第一章 「モンタペルティ現象」とは何か

わたしはイタリアの他の都市国家と比較して異常に高いフィレンツェの知的生産性の起源と原因を探求していた際に、そうした旺盛な知的生産活動は13世紀後半にまでさかのぼり、フィレンツェの旺盛な経済活動が開始された時期とはほぼ一致していることに気付いた¹⁾。しかしそれは本来史的唯物論に基づいているが、すでに自明のこととして広く受け入れられていて、たとえばルネサンス期の芸術活動をパトロニジという側面から説明する方法などにもその影響が認められる、文化的活動を経済的土台の上に立つ構造と見なす立場からは到底説明できない現象であることをも、わたしは指摘しておいた。

なぜなら13世紀後半のフィレンツェの旺盛な文化的活動は、その後に発生するフィレンツェ経済の飛躍的な発展以前から始まっていて、むしろ時にはそうした動きに先行しながらも、おおむねは経済活動の拡大と同時進行的に発展したらしいと、推定されるからである。そうした事例の一つとして、まだフィレンツェ経済が発展途上にあっただと思われる時期に、早くもフィレンツェ市内の俗人修道団体の数が飛躍的に増大しているという事

*前本学文学部

キーワード：モンタペルティ現象、戦後日本、中世フィレンツェ、共通点、問題点

実が見られる²⁾。すなわち、まだ土台となるはずの富の集積が実現されていない内に、すでに市民の文化活動は拡大していたわけである。だから少なくともこの時期に関しては、文化は経済の土台の上に立つものというよりも、その土台を立ちあげた牽引車の一つであったと見た方が真相に近いものと思われる。

このようにフィレンツェの経済的發展に先駆けた文化的活動の端的な一例として、ダンテの師とされるブルネット・ラティーニが記した、百科事典『トレゾール』がある。ラティーニがこの作品をフランス語で作成したのは、フィレンツェのプリーモ・ポポロ政権がモンタペルティ戦争に敗れたために、その政権を代表する使節としてスペインのアルフォンソ十世の許に赴いたまま帰国できなくなり、パリに亡命していた時期のことである。彼はその時期に他に『修辞学』と未完の『テゾレット』をも執筆したとされており、旺盛な知的生産を行っていた³⁾。それはまだシャルル・ダンジューがナポリ王国を占領する以前の出来事だから、フィレンツェ商人が親ゲルフィ党化した南イタリアに大挙して乗り込む時期よりも早く、したがって明らかにフィレンツェが経済ブームを享受する時代よりも先行している。ブルネット・ラティーニは、祖国に復帰できるか否かも定かではない時期に、当時ヨーロッパの学問の中心であったパリで、当時の先端的知識を収集して膨大な著書を書き上げ、たまたま1266年のベネヴェント戦争によってイタリアの状況が一変したおかげで、意外に早くその著書を祖国に持ち帰ることができたのである。なおその著書には（彼のもう一つの著書『修辞学』の場合も同様だが）、当時の最新の知識だったキケロの作品の紹介という形で、市民社会を営むための不可欠な技術である雄弁術のための修辞学の知識が収録されていたことは周知の事実である。このことからラティーニがこの著書を著した動機の一つは、モンタペルティで手痛い敗北を味わった祖国の同胞のために、理性と言論に基づいて共同生活を営

「モンタペルティ現象」試論

むために必要不可欠な知識を伝えるためだったことが推察し得る。

またそれがフランス語で書かれたことも意外ではない。ラティーニ自身か他の何者（ポーノ・ジャンポーニ？）かによって、『トレゾール』はその後イタリア語に翻訳されるが、それはあくまで暫定的な試みと見なされて、フランス語の原著の方が普及していたらしい。その理由はイタリア語の散文の確立が遅かったためで、この作品が書かれた時期から約40年後の14世紀の初頭、ダンテが『饗宴』を著した際にさえ、彼はラテン語ではなくイタリアの俗語でその作品を記す理由を、延々と弁明しなければならなかったほどである⁴⁾。この事実は、『トレゾール』以来約40年を経た14世紀初頭のイタリアにおいてでさえ、一人の知識人がイタリア語の散文で執筆する場合にどんなに大きな心理的障壁に直面せねばならなかったかを示す証拠となっている。もちろん『トレゾール』の翻訳者や、『ノヴェッリーノ』の作者、そしてダンテらの試みは決して無駄ではなかった。その後現れて「イタリア語散文の父」と呼ばれるボッカッチョに代表される散文家たちは、ダンテが切り開いた隘路を経て沃野に広がり、説話集、年代記、ノヴェッラなどの偉大な収穫を収めたからである。それらの作品は、ダンテ自身の『神曲』やペトルカカの『カンツォニエーレ』などの韻文による古典的作品と共に、イタリア文学をヨーロッパ随一の地位にまで押し上げて、クルティウスのいう「ヨーロッパ文学の首位権」⁵⁾を握らせるに至ったのである。したがってラティーニが亡命先のパリで『トレゾール』を執筆した際に、滞在先のフランス語を用いたのはきわめて自然な選択だったのである。この事実はそれと同時に、こうした試みがそれ以前のフィレンツェで行われたことは全く無かったことをも裏付けているのである。なお今文学（むしろ学問自体）という分野において起こるのを見たのと類似の現象が、まさに同じ時期のフィレンツェで、経済、文化、宗教、芸術などさまざまな分野で起きていたのである。こうしたいわばフィレンツェ

のビッグ・バンとも呼び得る現象が生じたのは、まさに13世紀後半のことであって、それ以前にさかのぼることは不可能なのである。

ついでにフィレンツェ文化について論じるならば、たとえば専制君主ジャンガレアッツォ・ヴィスコンティへの抵抗がフィレンツェ人文主義とルネサンス芸術の起源だとするハンス・バロンの説⁶⁾はあまりにも有名である。たしかにジャンガレアッツォがフィレンツェ市民にもたらした危機感、中弛み状態に陥りかけていたフィレンツェ文化に対する貴重な刺激であったかも知れない。だが、いずれもフィレンツェ文化と深く結ばれていて、しかも人文主義ともルネサンスとも縁の深いいわゆる文学の三冠、ダンテ・ペトラルカ・ボッカッチョや美術におけるチマブーエやジョットの存在を、その後起こったジャンガレアッツォの脅威によって説明することは不可能である。もちろん後代の文化には前代の文化と対立する要素は必然的に存在していて、その非連続性を強調する立場は十分に有り得る。したがって15世紀初頭に一種の文化的断絶を認めてその理由を探求することは決して無意味ではない。しかしたとえそうした断絶を認めても、それ以前の偉大な成果を無視して、1400年前後のフィレンツェで、無から有が生じたなどと主張することは許されない。むしろこの時期に生じた断絶をも含めて、一つの大きな伝統を認めざるを得ないのではないだろうか。たとえば美術史の場合、ヴァザーリはチマブーエやジョットも、マサッチョも同一の流れに属しているものとして記述しているのである。おそらくプロフェッショナルだったヴァザーリは、現代の美術史の専門家などよりもずっと鋭く中世とルネサンス期の画家の差異を感じていたはずだが、後代の潮流を尊重する余りにジョットたち中世の画家の重要さを否定したりはしなかった。それどころか、彼らに対して最高の敬意を表しているのである。しかしそのような伝統尊重家のヴァザーリでも、その反面彼の『(芸術家)列伝集』をチマブーエやジョットの時代から始めていて、それ以上

「モンタペルティ現象」試論

遠い過去にさかのぼる必要は認めていない。ヴァザーリも13世紀後半の人チマブーエやジョットを自分達が属する芸術の伝統の本格的な祖先だと見なしているが、それ以前にさかのぼる必要は感じていなかったのである⁷⁾。

たとえば近年『フローレンス史』を公刊したナジェミーもこの事実に注目して、その著書の中で、「フローレンスの文化的優位は、この[13]世紀の後半に突然、むしろ劇的に確立されたものである」として、「劇的に」という言葉を用いてその急激な変化を明記している。彼はさらに続けて、「ブルネット・ラティーニは古典的修辞学を復活させ、学識ある百科事典を書いた。まだフローレンスには大学はなかったけれども、サンタ・クロチェ [修道院] とサンタ・マリア・ノヴェッラ [修道院] は、イタリアでもっとも重要なフランチェスコ派とドミニコ派の知的影響の中心となった。ガイド・カヴァルカンティとそれに続くダンテの詩によって、フローレンス（すなわちトスカーナ）語は、イタリアにおける指導的な文学用語に成り上がる。14世紀の初頭に、ジョヴァンニ・ヴィッラーニとデーノ・コンパーニは、歴史の記述を新しい教養にまで磨き上げ、ジョットとアルノルフォ・ディ・カンピオはフローレンスを美術と建築の革新の主要な中心地にした⁸⁾」と記している。実はジェミニーはフィレンツェの経済発展についても、さらに簡潔な要約を行っている。それによるとフィレンツェは12世紀に将来の産業の基礎は築かれたものの、13世紀の初頭までは、国際貿易に関してはヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサに、銀行業に関してはシエナ、ルッカに、織物関係のマニファクチュアに関してはフランドルやイタリアのいくつかの都市に遅れを取っていたのだが、「経済の飛躍は、フローレンス人が日常品の国際的な交易者、商人、銀行家、織物製造業者としてめきめきと突出していった13世紀後半に、比較的早急に生じた。1300年までには、彼らはこうしたすべての分野でヨーロッパのリーダーだった⁹⁾」とされている。さらに従来行われて来た個々の家や会

社に関するサポーリやフィウーミらの研究も、フィレンツェ商人のイタリアの内外への進出の時期がやはり同じ13世紀後半に集中していたことを証言しているため、文化活動のみならず、経済活動に関しても、フィレンツェでは13世紀後半に、フィレンツェでは未曾有の発展が見られたものと推測することができる。

なお経済活動に関しては、この繁栄はこのまま長続きしたわけではなく、たとえば14世紀前半には大銀行の倒産が相次ぎ、また1348年のペスト大流行で人口が半減するなど、フィレンツェもヨーロッパ全体を襲った14世紀の危機をまともに体験した都市の一つだったらしい。だからルネサンス期のフィレンツェの経済は、1300年前後のピークをかなり下回っていたものようである。かつて素朴に信じられていたように、イタリアの商人が膨大な富をかき集めたために、ルネサンス芸術が開花したというわけではなかった。ロベルト・ロベスによると、13世紀末から14世紀前半のフィレンツェは、15世紀の最盛期にフィレンツェで唯一抜群のトップの地位にあったメディチ銀行とほぼ同数の支店を有し、したがって当然実際の規模においてもメディチ銀行に匹敵するものと推定される銀行を、バルディ、ペルツィ、アッチャイオーリと三つも有していたと見なされていて、それ以外にもいくつかの有力な銀行を有していたから、彼の見解に従えば、14世紀の危機の途中でフィレンツェの金融業は大幅に縮小したことになる。それでは今日の私たちの目にも驚異であるルネサンス芸術は、なぜ経済が縮小したはずの15世紀以降に創造されたのか。ロベスはこの疑問に答えて、ヨーロッパ経済が中世末期にピークに達した後に崩壊して長期にわたる低迷期に入り、かつては最も有利な投資先だった遠距離貿易農業や金融業のリスクが余りにも大きくなったために、それほど有利ではないが収益が確実な不動産や土地（農業）への投資（商人の土地貴族化）が進み、やはり比較的リスクが小さい（芸術作品や子弟の教育などの）文化への投資が行

われた結果だと説明する¹⁰⁾。

もしこのロバスの見解が正しいとすると、フィレンツェ経済は13世紀後半から一気にピークに上り詰めて、その後14世紀に没落した後、ルネサンス期を通じて元の水準に戻るができなかったことになり、一層13世紀後半の持つ意味が重要になる。そうした経済面をも含めて、以上に記したさまざまな事例をまとめると、フィレンツェがイタリアの指導的地位につき始めたもっとも早い時期は、13世紀後半のことだと推定することができる。もちろんそれ以前でもフィレンツェはイタリアの中央部のトスカーナの要地であって、しかも早い時期にフィエーゾレの司教区を合併していたために、人口も面積もトスカーナの他のコムーネよりも抜群に大きかったと見なされているので、相応の発展を遂げて実力を蓄えていた事実までは否定する必要はない¹¹⁾。しかし叙任権闘争時代ごろまでのトスカーナの首府はルッカであったし、また港湾都市ピサが早くから発展したために、フィレンツェは図体は大きくとも、久しくそれらの都市の後塵を拝していたという事実は否定できない。また南方の都市シエナも早くから金融業の都市として繁栄していた。ところがフィレンツェは、併合したフィエーゾレの境界線をめぐって、その富裕なシエナ相手に戦い続けなければならず、モンタペルティで大敗を喫した相手もそのシエナであった。第一フィレンツェは、北部の諸都市やピサなどと比べて、コムーネとしての独自性を主張することも遅かったようである。後にはゲルフィ党の都市の代表のように振る舞うが、フェデリーコ二世の権力が弱体化するまでは、おおむねその権威に柔順に従っていたのである。フェデリーコが健在な時期に皇帝権と正面から対決して勇名を残したのは、ミラノを中心とするロンバルディア同盟の諸都市や、パルマ、ポローニャ等であって、決してフィレンツェではなかったのである。

ところが1250年のフェデリーコ二世の死によって、トスカーナが皇帝権

の重圧から解放されるのとはほぼ同時に、フィレンツェにはブリーモ・ポポロ政権とよばれる市民の政権が誕生する。この政権は発足以降周辺の都市との絶え間なく戦争を続けており、その10年間は周辺のコムーネに対する連戦連勝に彩られている。こうしてフィレンツェは、ほとんどトスカーナにおける覇権を唱えるに至るが、それはあくまで軍事活動によってであり、後世の得意分野となる経済や文化の活動によってではなかった。そして政権発足以来10年目の1260年9月4日、ゲルフィ党の同盟軍を率いてシエナ領内に乗り込んだフィレンツェ軍は、シエナ軍とナポリ王国のマンフレディ王の配下のドイツ騎士団800騎と戦い、シエナの東方8キロのモンタペルティの丘陵地帯で、おそらく巧妙な待ち伏せにあったためだと思われるが、潰滅的敗北を喫した¹²⁾。その結果ブリーモ・ポポロ政権を担った市民たちとゲルフィ党の騎士たちは市外に亡命し、その後少なくとも丸6年間フィレンツェはギベッリーニ党の支配下に服していた。1266年の早春にシャルル・ダンジューがイタリアに侵入した時も、市外に亡命していたゲルフィ党騎士団とブリーモ・ポポロの有力市民を除くフィレンツェ本体の住民は、ギベッリーニ党の支配に服していたのであり、さらにモンタペルティ戦争以前からフィレンツェはローマ教皇庁から破門されていたために¹³⁾、シャルル・ダンジューのイタリア侵入のためにゲルフィ同盟に加わって協力したのは国外の亡命者たちとその仲間のみであり、フィレンツェの当時の支配者はギベッリーニ党員とそのシンパのポポロなので、市内で日常生活を営んでいたフィレンツェの住民の大半はその戦いと無関係であった。

要するに、13世紀前半までのフィレンツェは、後世のような文化国家でもなければ、経済大国でもなかった。その証拠の一つとして後代にはあれほど多数の有名人を輩出させたにもかかわらず、この時期以前のフィレンツェから、世界史的な知名人はただ一人も出ていないという事実がある。

「モンタペルティ現象」試論

ちなみに他のコムーネよりも大きな領域を有していて、地理的にもローマから遠くないにもかかわらず、このころまでローマ教皇をただ一人も出していない。フィレンツェから現れた最初の世界的知名人は、何といても1265年生まれのダンテであろう。彼が著した『神曲』のおかげで、私達はまさに芋蔓式に、同時代とそれ以前のフィレンツェ人の名前を知ることができる。しかしそこで主役をつとめるダンテ自身と、(架空の人物だとする説もあるが)その恋人のベアトリーチェ、および登場人物がその名前を挙げている、1266年ごろフィレンツェ近郊で生まれたジョットをのぞくと、世界史的という名に値するフィレンツェ関連の知名人は皆無である。たとえばダンテの祖父の祖父にあたるカッチャグイダが列挙している、いにしへのフィレンツェの偉人たちのだれ一人をも、世界の一般の人々は知らない。先に記したブルネット・ラティーニやグイド・カヴァルカンティも、『神曲』に関連している重要人物ではあるが、公平に言って世界史的知名人とは到底認め難いはずである。ところがそれ以後の時代となると、フィレンツェ出身の公証人の息子で1304年生まれのペトラルカや1313年生まれのボッカッチョを始め、かなり芸術家や文学者にかたよってはいるものの、実業家や思想家や政治家から教皇などにいたるまで、フィレンツェに関連した世界史的知名人は続々と登場する。このことから、13世紀後半のフィレンツェで重大な変化が生じていたことが推測できる。

そこで13世紀後半に、フィレンツェでこうした変化が生じた原因は何であったか、という疑問が当然生じるはずである。ところが意外にも、私が『モンタペルティ・ベネヴェント仮説』を刊行するまでは、そうした疑問をまともに提出した人も、それに対して一応の解答を行った人も存在していなかったのである。まず第一にフィレンツェの歴史において13世紀後半の持つ重要性をはっきりと指摘した記述すら乏しかった。それまでに私が記して来たこととかなり内容的に重複しているにもかかわらず、私がわざ

わざとジェミニーの一文を引用したのも、彼が大胆にも「劇的に」という言葉まで添えて、その事実をきっちりと指摘していることを評価しておきたかったからに他ならない。従来はその点が曖昧だったために、この事実に対する問いも生じず、当然それに対する一応の答えすら出て来るはずがなかったのである。といってもたとえばイタリア文学の出現と急激な発展に関しては、専門家の優れた研究の蓄積は存在していた。そうした研究の一つは、1260年から1280年にかけて、フィレンツェを中心としたトスカナ地方では、詩人・文学者の数がその前の30年間（1230年から60年）に比して、何と7人から87人へと12.4倍もの急激な変化を示したという事実を指摘しているのである¹⁴⁾。ちなみにこの同じ20年間に、1266年のベネヴェント戦争の影響でシチリア地方などは12人から0人へと潰滅していて、トスカナを除いたイタリア全土の総数が、52人から37人に減少しているにもかかわらず、（ただしボローニャ大学が存在し、グイド・グイニツェリを中心にボローニャ派を生んだエミリア・ロマーニャ地方では3人から11人と約4倍増加しているのだが）トスカナ地方だけが先に見たとおり12.4倍という、狂い咲きのような伸びを示していたのである。それに較べるとエミリア・ロマーニャ地方の伸びなどは、絶対数を比較しただけでも、取るにたらない出来事だと見なすことができる。私は今記したような中世とルネサンスのイタリア文学史の統計的研究の成果や、アメリカの『イタリア文学事典』に基づいて自分で作成した、イタリア国内における都市別の変化を比較することが可能な資料によって、フィレンツェ文学が離陸した時期を把握し、同時にフィレンツェ人たちが様々な分野で活動し始めたのも、おそらく同じ時期だったはずだと推測したのである¹⁵⁾。そしてこの時点に生じた重大な出来事といえば、1260年にフィレンツェ市民が大敗を喫したモンタペルティ戦争以外には考えられないという結論に達した。そこで私は文化的にも、経済的にもモンタペルティの敗戦がフィレンツェの

「モンタペルティ現象」試論

その後の発展に決定的な影響を与えたという仮説を唱え始めたのである。

それ以後私は、この問題に関して、さらに視野を軍事、文化一般、経済、社会などへと拡大して、いくつかの論文を書き、それらをまとめて『モンタペルティ・ベネヴェント仮説』という表題をつけ、大阪外国語大学学術研究双書として刊行した。その後その内の一部を改訂して、『敗戦が中世フィレンツェを変えた——モンタペルティ・ベネヴェント仮説——』を再度刊行した¹⁶⁾。このように二度も世に問うたにもかかわらず、この仮説に対しては、私信の形ではいくつかの感想を受け取ったけれども、一度も公的な批評を受けた記憶はなく、完全に黙殺されたまま今日に至っている。もちろん黙殺されていることはやむを得ないとしても、単なる啓蒙書ではなく一応研究書として発表しているにもかかわらず、当然記載されているはずの中世とルネサンス期のイタリア史やフィレンツェ史に関連した文献目録からもほとんど常に無視され続けていて、これらの書物の存在すら認められていないというのが現状である。

ところで私が受け取った私信の一つで、私の仮説はハンス・バロンの説をさらに時代をさかのぼらせたものではないか、というご指摘を受けたことがあるが、フィレンツェ史の流れを均質なものと見ずにターニング・ポイントの存在を認めてその原因を探っていることや、戦争をそうした変化の契機と見なしていることなどで、二つの説の間にはそう見られても仕方がない類似点があるのかも知れない。しかし実情はダンテ研究から出発した私にとって、イタリア・ルネサンスの起源や人文主義の発展などという問題は比較的関心の薄い事柄であり、バロンの説を一応知識としては知っていても、個人的にその説から強い感銘を受けた記憶はない。私の仮説は、あくまでフィレンツェという異常に知的生産性の高い都市の特異性の起源を探求した結果であって、同じ発想に基づいて年代をさかのぼらせただけのものではない。もしもバロンの説が先にナジェミーが記した変化や、サ

ポーリらの指摘している事実を説明するのに十分なものであれば、私はそれ以上付け加える必要を認めないが、残念ながら14世紀末の戦争で13世紀後半の現象を説明することは不可能なのである。

それに二つの仮説の間には相違も大きい。第一バロンの説には、専制君主ジャンガレアッツォとの闘争という、ナチス・ドイツからの亡命者らしい、読者の正義感にアピールする要素があった。あの仮説があれほど反響を呼んだ理由の一つは、反ファシズムのレジスタンスを体験したり、共鳴したりした世界の知識人にアピールしたためではないかと思われてならない。それに対して私の説は、敵地に侵入して天罰のような敗北（奇しくもフィレンツェ市民は当時破門されていた）を喫した人々が、命からがら逃げ帰った後に繰り広げた必死の反応とその後の影響とを追及しているものであり、そこにはバロンの説のように読者にアピールする要素は皆無である。

さらにもう一つ、より重要な違いが存在する。それはフィレンツェのジャンガレアッツォ・ヴィスコンティとの戦争が、モンタペルティ戦争のような敗戦ではなかった、という厳然たる事実である。といっても、フィレンツェが自力でジャンガレアッツォを倒したわけではなく、実情は敗戦寸前にジャンガレアッツォが勝手に死んでくれたおかげで辛うじてしのぎきったに過ぎない。それでも結果的にフィレンツェ市民は勝利者となることができ、数年後に敵の領土だったピサまで占領している。さらにハンス・バロンは、その勝利がフィレンツェ市民に自信を与えた結果、新しい芸術や人文主義を発展させた主張していたのではなかっただろうか。戦争自体にしても迂闊に攻めこんで惨敗を喫するのと、粘り強く守り抜いて勝利するのとでは、まさに雲泥の差があることを認めざるを得ない。また勝利の結果、自信や発展が生じたとするバロンの判断は、誰の目にも論理的で妥当なものである。第二次世界大戦の勝利者アメリカとソ連が、その後の数十年間誇り高く世界を支配したことは、まだ記憶に新しい事実である。

「モンタペルティ現象」試論

だからモンタペルティ戦争に惨敗して政権そのものが崩壊するという未曾有の悲惨な体験を味わったフィレンツェが、その結果繁栄したとする仮説には疑義が生じて当然である。

実は私がこの仮説を唱え始めたころ、やはり同じような疑問を聞いた覚えがある。私はそうした疑問は当然だと受け入れる一方で、しかし敗戦が繁栄や発展につながる可能性は否定できないのではないかと考えていた。第一に私がこの説を唱え始めた当時の1980年代前半には、石油危機に代表される数々の危機を克服した日本経済が、本格的に軌道に乗り始めていて、戦前とは比較にならぬ発展を遂げていたからである。またそれよりもずっと早い1960年代後半のイタリアで、「イタリア経済の奇跡」⁷⁾という経済ブームが起こったことを聞いており、おまけにその状況を描いた「甘い生活」という映画さえ見ていたからでもある。それに劣らず強い印象を受けたのは、小学生のころ着の身着のまま故郷の村の周辺の小屋に住みついたのを見た引き揚げ者たちの村落の平均所得が、寒冷地農法と集団出荷とをうまく組み合わせて従来の農家の平均所得を超えたという噂を大学院生時代に耳にしたことだったような気がする。空襲を受ける事さえなかった農村の子供にとって、村の周辺の小屋に住みついた満州からの引き揚げ者と空襲の罹災者たちこそ、まさに敗戦の象徴のような存在に見えたのだが、その代表的な敗戦の犠牲者たちが従来の農家以上に成功しているという噂は、万年学生的生活を続ける自分に得体の知れない衝撃を与えたような気がする。私はどうやらすでにそのころから、フィレンツェ史とは関係なく、勝利のみならず、敗戦にも繁栄や発展を引き起こす可能性があるのではないか、という疑問を無自覚に抱いていたようである。そして小沢征爾、五木寛之、赤塚不二夫……などと、ちょっと考えただけでも次々と思い出せる、引き揚げ体験を持つ極めて個性豊かな人々の活躍によって、敗戦という苛酷な体験がいかに人を鍛えるかを実例によって知り、おそらく同じことが

歴史上にも発生しているに違いないと類推したためである。

こんな風には書き進めると、当然13世紀と現代とでは余りにも状況が異なり過ぎるではないか、という反論が生じるはずである。こうした考察は到底学問の名に値しないという人もいるであろう。しかし13世紀後半のフィレンツェの変化は、モンタペルティの敗戦を抜きにしては考えられず、20世紀後半の日・独・伊三国の繁栄も、1943年から5年にかけての三国の敗戦を抜きにしては考えられないのではないか。そこで敗戦が繁栄をもたらした場合それを一般的に「モンタペルティ現象」と名付けて、まとめて考察してみてもどうかであろうか。モンタペルティという言葉はイタリア語で「開かれた山」を意味していて、敗戦が一国の行き詰まりを切り開くという意味で、まさにこの現象を象徴している名前だと言えるであろう。

本論の場合、まとめて考察すると言っても、あまり多数の例を扱うことは困難なので、13世紀のフィレンツェと20世紀の日本の実例をモデルとして取り上げて考察しておきたい。まず次の第二章では両者を比較対照して両者の共通点をまとめ、この現象を発生させる条件の主なものを明らかにする。第三章では、この現象の発生を妨げたり見えなくさせている原因や、その後代への影響について主にフィレンツェ史を基にして考察し、またそれによって生じる恐れのある弊害をも指摘しておきたい。

第二章 二つのモデルから見た「モンタペルティ現象」発生の条件

時代も歴史的背景も全く異なる中世フィレンツェと現代日本に生じた現象ではあるが、細部を無視して考察すると、意外に共通した要素が少なくないように思われる。それらの内の特に重要だと思われる条件を以下に列挙してみよう。

まず基本的な条件として、この現象が発生する直前まで、二つの国は好戦的な軍事国家で、しかも敗戦までに長年にわたって戦っていたという事

実が認められる。中世フィレンツェにおける対外戦争の最古の記録は、すぐとなりの丘陵地帯に位置するフィエーゾレとの戦いである。この戦いは、フィエーゾレが由緒あるエトルリア起源の都市だったので、古代ローマにとってのエトルリア都市ウェイイ攻略にも似た戦いだが、フィエーゾレがローマに対するウェイイよりもはるかにフィレンツェに近いので、というよりもむしろ古くから存在したフィエーゾレのふもとに、フィレンツェが後から割り込む形で人為的に建設されたために双方の勢力圏が重なりすぎていて、存亡をかけた戦いとならざるを得なかった¹⁾。フィレンツェはこの戦いに勝ってフィエーゾレを併合してしまったので、司教区を二つ含む広大な領域を有するコムーネとなったが、併合したフィエーゾレ領の境界線をめぐる近隣のコムーネとの紛争が絶えず、とりわけ肥沃なキアンティ地方をめぐって南方のシエナと戦いつづけることになった。たとえばダーヴットゾーンの『フィレンツェ史』にはその経過が延々と記されている²⁾。こうした経緯から、この時期のフィレンツェは必然的に好戦的なコムーネとならざるをえなかったと言える。またヴィツラーニの『年代記』には、それ以外の周辺の領主たちや小都市との戦争も細々と記されており、さらにそれまでは友好的だった富裕な港湾都市ピサとの間で、ローマの枢機卿が二重に約束した子犬を巡って戦争が勃発したという奇妙な記述が見られるので、シエナ以外の相手とも頻繁に戦わねばならなかったことが分かる³⁾。傭兵制度がそれほど発達しておらず、原則として市民皆兵制のコムーネ同士が戦っていたこの当時のことなので、領域が広くて多数の兵士を徴募し得るという利点によって、フィレンツェはトスカーナにおける軍事大国であった。

それでも神聖ローマ皇帝フェデリーコ二世が健在だった時代には、フィレンツェは皇帝権による制約に服していたらしい。前章でもすでに記したが、フィレンツェは皇帝権に積極的に抵抗した都市ではなかった。1237年

11月27日にコルテノーヴァでフェデリーコ相手に完敗を喫した後も、ロンバルディーア同盟の主要都市ミラノ、ブレッシヤ、アレッサンドリアは抵抗を続けたし、45年のリヨン公会議で皇帝が罷免され、全イタリアに反フェデリーコの機運が高まった際、47年に公然とフェデリーコに反旗を翻したのはパルマであった。翌48年2月、フェデリーコが反抗したパルマを包囲していた際、油断して鷹狩に興じている最中にパルマ市民の捨身の急襲を受けてまさかの惨敗を喫した後でさえ、48年の内紛でフィレンツェから追放されたのはゲルフィ党の方だった。それは、皇帝が息子のフェデリーコ・ダンティオキアを代官として援軍とともに派遣したためだとされるが、ギベッリーニ党の援軍が周辺部を自由に往来していること自体、当時まだフェデリーコの権威に服していた証拠だと見なすことができる⁴⁾。ところが翌49年5月に皇帝の息子エンツォの率いるモデナとギベッリーニ党の軍隊がフォッサルタの戦いでボローニャとゲルフィ党の軍隊に敗れ、エンツォはボローニャの捕虜となる。こうしてイタリア中部における皇帝の権威が失墜した50年の9月、フィレンツェから追放されていたゲルフィ党がフィレンツェ郊外のフィリネでギベッリーニ党を破ったためにギベッリーニ党の権威が失墜し、翌10月に貴族から主導権を奪い取った平民たちがプリーモ・ポポロ政権を樹立して追放中のゲルフィ党を呼び戻した⁵⁾。そしてその後の数年間は、ギベッリーニ党も追放されることはなく、ポポロの政権のもとでゲルフィ党と共存していた。フェデリーコが死去したのが50年12月13日のことだから、フィレンツェはフェデリーコの権威が消滅する寸前に、ようやく皇帝権の軛から脱したわけである。

フェデリーコの死後、その長子コッラード（コンラート）はドイツにいてなかなかイタリア統治に着手せず、ようやく南下したがほどなく死去（54年）、その後を腹違いの弟マンフレディが継いだ。こうしてイタリアでは、中世を通して例外的な権威を誇ったフェデリーコ二世が死に、そ

の後数年にわたって巨大な力の空白が発生した。フィレンツェのプリーモ・ポポロ政権は、この力の空白の中で自らの権威を確立した。すでに私の著書でもくわしく紹介した通り、この政権に関するヴィッラーニの『年代記』の記述は戦争の記録が半ば以上を占めている⁶⁾。私たちはポポロ、すなわち人民の政権であれば当然平和を愛好するものだという錯覚を抱きがちであるが、多くの革命政府の現実が対外戦争に満ちているのと同様、プリーモ・ポポロ政権は、フィレンツェ共和国の歴史全体を通して見ても類い希な程好戦的な政権であった。それもメディチ政権を追放した共和制末期の政権のように、外からの脅威と戦う防衛戦争を強いられていたわけではなく、大半は自ら外に討って出る戦争に終始したのである。この政権のために弁護するならば、トスカーナにはピサとシエナというギベッリーニ党に近い有力コムーネが存在していて、常に外部のギベッリーニ党勢力と結託してことを起こそうとしていたことや、フィレンツェの周辺にポポロ政権の理念と敵対する封建領主が残っていたことなどが考えられるが、ともかくプリーモ・ポポロ政権の下で、それ以前とは一変して対外戦争が相次いだことは確かである。立て前として職業軍人に頼らず市民全員が戦うというコムーネ同士の戦争には、極寒の冬季などには戦いを避けるという暗黙のルールがあったが、プリーモ・ポポロ政権はそうしたルールをも無視して戦い続け⁷⁾、わずかな例外を除くと連戦連勝の状態が続いた。

フィレンツェがこうした好戦的なコムーネと化した最大の原因は、トスカーナとその周辺にフィレンツェの軍事行動に制約を加えるだけの強国が存在せず、プリーモ・ポポロ政権が戦えば勝てるという状況に置かれていたことであった。この政権の記録を検討しても、彼らの戦争の明確な目標は把握できない。最も顕著に感じられるのは、まだ根強く残る皇帝権の脅威に備えてその与党であるギベッリーニ党の勢力を抑制するという方針で、そのためにプリーモ政権末期にはギベッリーニ党の人々が亡命するのだが、

アレツォではギベッリーニ党を追放したゲルフィ党政権と戦ってギベッリーニ党を呼び戻させるなど、その方針と矛盾した行動も認められる。同様に領地拡大や封建領主との戦い、あるいは経済的動機の戦いにも一貫性は認められず、明確な方針は把握し難い。フィレンツェ市民は1254年を「勝利の年」と呼んで、ポDESTA館の西側の壁に碑銘を嵌め込み、フィレンツェの富、勝利、幸運、力を称え、フィレンツェには海と陸、すなわち全世界を支配する権利があることを主張し、古代ローマのように正義と法によって統治される人民に対する永遠の勝利を予言したが⁸⁾、それはまさに力の空白の中で具体的目標を喪失したまま軍事行動を続けているフィレンツェ市民の心的状況を象徴する行為であった。こうした全能感に止めを刺したのが、プリーモ・ポポロ政権成立から10年後の1260年9月4日に起きたモンタペルティの敗戦であった。敗戦以後のフィレンツェ市民は紆余曲折を経て、経済大国に変貌する。フィレンツェ市民が自らのそうした変化を自覚していたことは、モンタペルティ戦争当時シエナの指導者だったプロヴェンツァーノ・サルヴァーニに関するダンテの『煉獄篇』の中の次の詩句によっても明らかである。

ほんの少し私の前で歩いているこの男は、
その名がトスカーナ中に鳴り響いていたものだが、
今ではシエナでもやっとささやかれている程度だ。
今フィレンツェ人がちょうど貪欲の狂気に憑かれているように、
当時同じ彼らを取り憑かれていた高慢の狂気が打ち砕かれた時、
かのシエナの首領だったというのに⁹⁾。

1945年の敗戦まで、日本が好戦的な軍事国家であり続けたことは、今更証明する必要はあるまい。日本のために弁護するならば、当時は植民地支

「モンタペルティ現象」試論

配が世界の常識であり、日本を含めいかなる強国も、植民地を求めて狂奔していたという厳然たる事実がある。日本もそうした植民地獲得競争に巻き込まれていて、敗戦までの15年とも8年とも言われる歳月を戦い続けていたのである。そうした植民地獲得競争はすでに数世紀来世界の常識であり、植民地だった地域の人民にとっては許し難い事実だが、植民地の所有国は敗北するか、それに準じた何らかの困難が生じない限り、自らの植民地を自発的に解放しようとはしなかった。主に18世紀から19世紀にかけて南北アメリカで、また20世紀半ば以来アジア・アフリカで生じた一連の植民地からの解放は、植民地の所有国がさまざまな事情によって植民地経営が困難になり、維持し難くなったために植民地を放棄せざるをえなくなったために実現したというのが実情である。20世紀のアジアの場合、その大半が西欧諸国だった植民地所有国のアジアにおける植民地経営を困難にした最大の原因は、日本が西欧諸国にまじって植民地獲得競争に参加したことであった。したがって日本は、自ら競争に加わることで結果的にアジアの大半を植民地的状況から解放する原動力となったのである。

実は日本が好戦的な軍事大国になったのも、長年にわたる鎖国状態から無理やり国際社会に引き摺りこまれた時、アジアの多くの地域が西欧諸国の植民地と化していて、軍事的に弱体では独立を維持できなかったという理由によるものである。そうした状況は、日本人に自国の存亡に関して激しい危機感を抱かせ、世界でも類い稀な軍事を重んじる国家を形成させた。そうした体制のおかげで何度かの戦争に勝利して大国の仲間入りした日本は、当時の世界の常識にしたがって、当然植民地と勢力圏の獲得競争に邁進した。日本は植民地獲得競争に遅れて参加したために、自国の周辺部にしか手が出せず、過去には文化的な恩恵を受けてきた周辺諸国を植民地にしたり、将来植民地または勢力圏に加えるために侵入して戦ったために、それらの国々の住民の恨みを買うことになった。

さらに日本を混迷に導いたのは、ヨーロッパを主戦場とした第一次世界大戦の勃発である。この戦いの途中で、一度は戦争に勝ったとはいえ、当時の日本にとって最大の脅威の一つだったロシア帝国が崩壊すると、もう一つのアジアの大国である中国も混乱のさ中であつたので、アジアには巨大な力の空白が出現したかに見えた。航空機が未発達時代には、イギリスやアメリカとは今よりも距離感が大きかった。第一次大戦後、ヨーロッパ諸国ではまだ第一次大戦の傷が癒えておらず、アメリカの実力の評価もまだ定まらず、しかもそのアメリカが1929年の経済恐慌で権威を失墜させるに至っては、こうした力の空白は過大に感じられ、そのために生じる万能感の影響も強力だった。特に日本の軍人に与えた影響は大きく、日本がアジア地域で武力を行使しても、それを制止できる強国が近くに存在していないという自信が軍人たちを鼓舞し、文民政府による統制を不可能にした。軍人たちは一種の万能感に浮かされて戦い続け、満州国を建設しただけではなく、戦線を拡大させて中国に攻めこんだ。もちろんこうした独断的な行動は国際社会の反発を招き、日本は国際連盟から脱退する。具体的な目標を持たない戦争は、歯止めを欠いていて拡大の一途をたどり、出口のない膠着状態に陥ってしまう。中国は一時期様々な勢力に分裂していたが、日本に対抗するために団結し始め、ソ連やアメリカなどの国際的支援を受けて、日本軍に対する抵抗を強化していった¹⁰⁾

第一次世界大戦後、戦後に結成された国際連盟が中心となって世界秩序を維持していたが、ロシア帝国のあとに出現した共産主義政権がソヴィエト連邦を形成してマルクス・レーニン主義に基づく理想社会の幻想を世界の中に振り撒き、イタリアとドイツにファシズム政権が出現して自民族の栄光を訴えるなど、左右両翼から当時の世界秩序を揺るがした。国際的に孤立し始めていた日本は、国内に根強く存在した反対意見を押えて、ヨーロッパのファシズム諸国に接近し、日独防共協定から日独伊三国同盟にまで

発展させた。もともと1861年に統一したイタリア王国と1871年に統一を完成したドイツ帝国は、1868年に明治維新を実現した日本帝国同様近代国家としての出発が遅く、植民地獲得競争に遅れを取ったという共通の不利な条件を抱えていたことが、三国の結束の基盤となった。ドイツとイタリアはそれ以前に日本ほど連続して戦っていたわけではないが、22年に成立したムッソリーニのファシズム政権も、33年に誕生したヒトラーのナチズム政権も、好戦的な愛国主義を標榜し、イタリアのエチオピアやリビア侵略や両国によるスペイン内乱への干渉など、進んで戦いの機会を求めた。いずれの国々においても、日本と同様反戦を表明できる勢力は暴力的に排除されていた。やがてヨーロッパでドイツが暴走し始めて第二次世界大戦が勃発し、ドイツは東欧諸国を侵略しフランスを占領してイギリス軍を一度は大陸から駆逐した。その勢いを見てバルカン半島とギリシャでの覇権を望んでいたイタリアも参戦した。さらにドイツは矛先をソ連に向け、破竹の勢いで攻め込んだ。もともと国土が狭く資源の乏しい日本は、中国戦線に打開のめどが立たないまま、中国を支援する国々が結束して日本に対する資源の供給を停止することを恐れる余り、ドイツがソ連に易々と進攻するのを目の当りにして、その実力に望みを託し、日本の最大の抑圧者と見なしていた米英およびその同盟国に対して開戦した。アメリカ相手の戦争で、日本は開戦と同時に目覚ましい戦果を上げたが、半年余りでその快進撃は止まり、均衡状態も長くは続かず敗戦へと転落した¹¹⁾。

以上の概観によって、ヨーロッパ中世と現代世界という大いにことなった環境にあるとはいえ、フィレンツェと日本という二つの国の敗戦には、案外数々の共通点が認められる。まず、いずれも周辺諸国と比較して決して弱小な存在ではなかったこと、そしてなんらかの事情で周囲の諸国よりも遅れてスタートしていて、そのことを強く自覚していたこと、その結果一時的に軍事行動に傾斜していて、その他には選択肢がないかのごとく

思いこんでいたこと、その結果独善的な行動に走り、フィレンツェは敗戦当時、当時の最も権威ある国際機関だった教皇庁から破門されていたし、日本は国際連盟から脱退していたこと、また軍国主義の方針は一時的には成功したかに見え、たまたま発生した力の空白の中で全能感に陥り、具体的な目標を持たずに戦線拡大に突っ走ったこと、フィレンツェは古代ローマ帝国の復活、日本は「八紘一宇」による大東亜共栄圏の建設などという誇大妄想的な夢を掲げねばならなかったという点で、二つの国はそっくりの迷路にはまりこんでいたと見なし得る¹²⁾。こうした軍国主義から経済活動に専念する平和国家への転換こそ、モンタペルティ現象が生じる最も重要な原因だったことを考えると、この現象は決して不可解なものではなく、自然な成り行きで発生したことが納得できるはずである。

さらにフィレンツェと日本に共通しているもう一つの条件は、敗戦後に発生した国際状況が両国の経済的、文化的発展にとって有利に作用したということである。この点に関しては、フィレンツェと日本とではいくらか事情が異なっている。すなわちフィレンツェの場合は、敗戦そのものではなく、それ以後にたまたま発生した国際的状況の変化が影響しているので、必然的というよりも幸運によるところが大きい。しかし長期的にはやはり類似した条件が生じたと考えることができる。フィレンツェは敗戦後の6年間ギベッリーニ党の支配下におかれていた。ナポリのマンフレディ王を首領とする当時のイタリアのギベッリーニ党の傘下では、フィレンツェの経済的飛躍など望むべくもなかった。『神曲』が伝えるところによると、ギベッリーニ党の会議でフィレンツェそのものの破壊が決議されそうになった時、フィレンツェではモンタペルティ戦争の首謀者と伝えられているファリナータ・デッリ・ウベルティの強硬な反対で辛うじて破壊を免れたことになっている¹³⁾。さらにプリーモ・ポポロの戦力を恐れるギベッリーニ党と周辺の領主らによって、徹底した武装解除が行われ、またギベッリ

ーニ党の防御のための土木事業や亡命したゲルフィ党員の家屋と財産の没収なども行われた。したがってフィレンツェは、敗戦がそのまま経済状況を好転させる条件とはならなかった。

そうした状況を一変させたのは、1266年2月26日、教皇庁の勧めでイタリア十字軍を率いて南下したフランス王子シャルル・ダンジューが、カンパーニャ地方のベネヴェントでマンフレディ王を倒して、新たにアンジュー王朝を開いたことであった。フィレンツェの繁栄はこの戦いにフィレンツェが協力したことへの論功行賞のごとく説明されることがあるが¹⁴⁾、亡命中のゲルフィ党員や金融業者などは確実に協力しているものの、当時のフィレンツェのコムーネそのものはギベッリーニ党の支配下にあり、おまけにまだ破門を解除されていなかったのだから、コムーネ自体としては傍観していたはずである。シャルル・ダンジューの財政支援に関しても、たとえばナジェミーに代表される通説が記しているほど、フィレンツェの富が貢献したとは考えられない¹⁵⁾。シャルル・ダンジューの遠征の費用の半分を調達して、そのメイン・バンクとなったのはシエナのボンシニョーリ銀行であり、トスカーナには他にもシャルルに協力した有力銀行がいくつもあった。もしもフィレンツェから亡命中の銀行家にそれだけの力があれば、ウルバヌス四世が破門の脅しをかけてまでギベッリーニ党の都市シエナの銀行家に協力を命じる必要はなかったはずである¹⁶⁾。ナジェミーはなぜかジョルダンやレオナルドやヴェールなど、フランス人研究者のすぐれた研究を一切無視して、ほとんど当時の年代記類とダーヴットゾーン、およびラヴェッジらの共同研究やホームズに代表される英語圏の研究者の成果だけを利用してこの部分を書いている¹⁷⁾。しかしフランス出身のアンジュー王朝に関しては、一時期おそらくフランス人研究者の研究が最も進んでいたものであり、しかも第二次世界大戦の末期にイタリアの裏切りを怒ったドイツ軍がナポリのアンジュー王朝関係の資料を焼却したため、過去

のその研究水準に戻ることは不可能であることを考えると、やはりそれらの研究成果やテルリッツィの資料集¹⁸⁾などを無視しては実態を把握することは不可能だと言わざるを得ない。さらにシエナを中心とする当時のトスカーナ全体の状況をほとんど無視して、フィレンツェの状況だけをとらえようとしても、極めて不十分な結果しか出てこない。ナジェミーの『フロレンス史』が学問的成果を丹念に取り入れたすぐれた労作であるだけに、このあたりの記述が従来の通説をかなり不完全な形でまとめているだけに過ぎないことが惜まれる。おそらくそれは、ナジェミーがすでに引用した通りこの時代のフィレンツェにおける経済・文化史的発展の重要性を認めておきながら、この時代のフィレンツェに生じていた変化の特異性を十分究明しようとしなかったためではないかと思われる。

ベネヴェント戦争でギベッリーニ党の盟主マンフレディ王が倒れた後でも、プリーモ・ポポロ政権やゲルフィ党の亡命者がフィレンツェに直ちに帰国できたわけではない。彼らの帰国はベネヴェント戦争から8カ月半後の11月11日に、ギベッリーニ党のための増税に憤慨してポポロが蜂起した結果だったとされている¹⁹⁾。またモンタペルティ戦争でシエナにはまだ多くの捕虜が残されていたにもかかわらず、それを取り戻すためのシエナに対する報復戦争、コッレの戦いが行われたのは、それからさらに2年半後の1269年6月17日のことで、それはシャルル王の部下のフランス人ジャン・ブリトーが率いるフランス軍とトスカーナのゲルフィ党員によって戦われ、遅刻したためにポポロの軍隊の出番はなかったという²⁰⁾。ここで注目されるのは、捕虜の多くがポポロ階層であったにもかかわらず、この時までにかつてあれほど勇猛を誇った軍隊を維持していたポポロ階層からこうした報復戦争が全く発案されなかった、という事実である。ギベッリーニ党支配の時代に行われたプリーモ・ポポロの軍隊の徹底した武装解除もその一因と見なし得るが、ギベッリーニ党員が追放された後には、ポ

「モンタペルティ現象」試論

ポロ軍再建と報復戦争の動きが生じても何の不思議もないのに、そうした動きは生じず、軍事活動はもっぱらナポリ王に委ねていたのである。このような紆余曲折を経た後ではあったが、従来ギベッリーニ党の最も強力な地盤で、北部のギベッリーニ党都市の商人が食い込んでいたナポリ王国に、教皇庁がシャルル・ダンジューを送り込んでゲルフィ党化した結果、ギベッリーニ党ゆかりの都市の商人は一掃され、イタリア南部におけるフィレンツェ商人の活躍の舞台は一挙に拡大した。フィレンツェから亡命したポポロが避難した先が、フランスとその周辺だったことも、フィレンツェの商圈が北と南に拡大することに貢献した。フィウーミヤサポーリによる綿密な研究が、多くの名門商人の国外進出の上限を13世紀後半だと認めていることと、モンタペルティ敗戦とそれ以後に生じたイタリア南部におけるこうした大変動とは密接な関係があることは明らかである。このように必然的とは言えないベネヴェント戦争の結果、フィレンツェは当時のイタリアにおける勝ち組の仲間入りをして、国際的に有利な立場に立つことができたのである。プリーモ・ポポロ時代に武力に頼って国際的な孤立を恐れなかったために亡国の危機を体験した結果、ギベッリーニ党を追放して誕生したゲルフィ党政権は、一転して国際関係を特に重視するコムーネに生まれ変わり、フランスとローマ教皇庁とナポリ王国とを結ぶ枢軸の一角に加わった²¹⁾。こうした国際関係の変化こそがフィレンツェ商人の活動範囲を拡大して、その経済的大発展をもたらしたのである。

第二次世界大戦後の日本の場合はもっと単純明快で、周知のごとく主にアメリカによって占領され、新しい憲法の下で立て前としては軍備さえ否定されて、戦前とは全く異なる体制の国家となった。防御の手段を失って一方的に収奪されても仕方がない状況であったが、すでに大戦中から世界各地で発生していた冷戦が、日本にとって戦争中に待望された神風のような効果を発揮した。占領した国家から容赦なく資源を剥奪した共産主義陣

営の貧困な盟主ソ連とは異なり、自由主義陣営の盟主となった富めるアメリカは、日本を冷戦における有力なパートナーに仕立てあげようとして、民生の安定に努めた²²⁾。もしも日本が共産主義陣営に組みこまれていたら、北朝鮮なみの独裁国家となり、多数の餓死者を出しながら、独裁者を賛美しつつ体制の維持のみに汲々としていた可能性すら否定できない。少なくとも戦後日本が体験した経済的、文化的発展の可能性は皆無だったのであろう。マルクス・レーニン・毛沢東主義による理想国家の建設を夢見た共産主義者にとっては遺憾な事態であったが、そうした理想を持たない一般大衆は、徴兵されることもなく、日常の経済活動に専念することができる体制に順応した²³⁾。冷戦とはいっても、特にアジアでは共産主義陣営と自由主義陣営の間に時折武力紛争が勃発し、地理的に近い朝鮮やベトナムで起きた戦争では軍需物資の需要が生じて、日本の経済発展を刺激して飛躍させた。日本は先進資本主義国アメリカから多くのことを学び、経済的、文化的発展にとって有利な国際的立場に立つことができた。アメリカはモデルとなったばかりか、市場まで提供してくれた。その経過に関しては異なった点があるものの、敗戦後に有利な国際的状況が発生し、それをフルに活用している点が、二つの敗戦国に共通の現象である。

二つの国において見られる第三の大きな共通点は、敗戦が人を鍛えたことである。すでに長年にわたって続いた戦争自体に、人を鍛える作用があったことを誰も否定できないであろう。さらに終戦を迎えた後も、勝者には一応の平和が訪れるが、敗者は武装解除された後でも、生き延びるために戦い続けなければならない²⁴⁾。そうした武器なき戦いも、戦争そのものに劣らず人を鍛えたはずである。ここで忘れてはならないことは、敗戦の重圧は敗者全員に対して必ずしも平等にかかるわけではなく、不運な状況に置かれた人々に対して極端に不公平な形でかかるという事実である。そうした極端な不運を体験した人々の多くは死ぬか再起不能の状態に陥るが、

「モンタペルティ現象」試論

幸運にも生き延びてその体験を糧にした人々も存在した。その最も分かり易い事例として、中世フィレンツェの場合はギベッリーニ党支配から逃れた一群の亡命者、現代日本の場合は復員兵、とりわけ外地で捕虜になった後に帰国した復員兵や外地からの引き揚げ者、戦災で家屋や財産を失った罹災者などが考えられるであろう。

フィレンツェがこのような大きな敗戦を体験したのは未曾有のことであったが、フィレンツェから敗者が集団で亡命した例は初めてではなく、1248年にまず皇帝権の圧力の下でゲルフィ党員がフィレンツェ南東24キロの郊外の村フィリネに亡命し、58年にはプリーモ・ポポロと衝突したギベッリーニ党員が南へ50キロたらずのシエナに亡命していて、いずれの場合も帰国に成功していた²⁵⁾。モンタペルティ敗戦で市外に逃れたプリーモ・ポポロの要人とゲルフィ党員やその家族も、当然こうした前例に倣って、当初フィレンツェと同盟してモンタペルティ戦争に加わったルッカに亡命して再起を図ろうと考えた。そうした魂胆を見抜いたギベッリーニ党は、マンフレーディの代官ガイド・ノヴェッロ伯を先頭にルッカを攻撃し周辺の領土を占領し始めた。モンタペルティ戦争で多くの捕虜をシエナに捕えられていたルッカは、ガイド伯と交渉し、フィレンツェの亡命者を追放することと引き換えに、捕虜の釈放と領土の返還を求めて協定が成立した。突然ドイツ人の隊長が率いるギベッリーニ軍が乗り込んで来たため、フィレンツェとその他トスカーナ都市の亡命者はあわてて逃走せねばならなかった、というのが実情らしい。ヴィツラーニは、「亡命者の妻である多数の貴夫人が、ルッカとモドナ（ママ）の間にあるサン・ペッレグリーノ峠で子供を生んだ」²⁶⁾という奇妙な事実を記しているが、亡命者たちは一旦落ちていたたルッカから急に追出されて、ゲルフィ党の都市ローニャへと逃れた。

しかし本格的な軍人であるゲルフィ党の騎士たち約400人は、間もな

く活路を見いだした。騎士たちは着の身着のまま、馬や武器さえも揃わぬ状態でゲルフィ党の都市ボローニャにたどり着くが、早速隣のモデナから招かれて、ゲルフィ党の傭兵として戦いに加わって勝利し、さらにレッジョからも助力を求められて勝利して、いずれの都市でも追放したギベッリーニ党員から夥しい戦利品を奪い取ってたちまち立ち直った²⁷⁾。そしてこの地域のゲルフィ党傭兵集団として定着し、さらに1266年にはやって来たシャルル・ダンジューのイタリア十字軍に合流し、イタリアの事情に明るい利点を生かして手柄を立てた²⁸⁾。

それに反して、そうした機会にめぐまれないおよそ1000人のポポロ階層の亡命者たちには、さらにきびしい試練が待っていた。彼らは成功したゲルフィ党員とたもとを分かって、フランスへ逃れたらしい。彼らがフランスでどのように生きたかが、私の最も知りたいところだが、この時代の最も信頼できる証言者であるヴィッラーニは、何故かその『年代記』の中でこの逃避行については全く触れていない。ただ先に記した亡命者がルッカから追放され、多数の貴夫人が峠で出産した記録のすぐ後の箇所、唐突に次のように記している。

いみじくも多くの古人たちによって、(この時の)フィレンツェのゲルフィ党員のルッカからの退去は、彼らの富の原因であったと言われている。なぜなら多くの退去したフィレンツェ人は山を越えてフランスに稼ぎに行ったが、それはそれ以前にはおこなわれていなかったことで、その後そこから彼らは莫大な富をフィレンツェに齎したからである。そして我々の間で、「必要は勇者を作る」という諺が生まれた²⁹⁾。

まさに私が言いたいことをそのまま記している証言なので、私の著書では一部をもっとくだけた形に意識しておいたが、この訳の方が回りくどい

「モンタペルティ現象」試論

けれども原文に忠実なはずである。なおここでは、亡命者たちはゲルフィ党员の名で一括されているが、次の章で騎士階級のゲルフィ党员が、モデナやレッジョで勝利を得て富を取り戻したことが記されているのだから、当然フランスへ流れたのは主にポポロ階層だったと見なすことができる。

ここで注目すべきことは、この時点でフィレンツェのポポロにとってフランスへ行くことが未曾有の出来事であり、彼らにとって大変な試練だったように記されていることである。この事実は、私には大いに注目すべきことのように思われてならない。シャンパーニュの大市³⁰⁾などを含めて考慮すると、実際にフィレンツェの商業や金融活動がそれ以前に全くフランスにおよんでいなかったかどうかについては大いに疑問の余地があるが、フィレンツェの経済にくわしいヴィツラーニがはっきりとこのように記しているという事実は、少なくともこのころまで、フィレンツェの商人や銀行家をも含めた大半の人々にとって、フランスは遠い無縁の国でしかなかったと受け取るべきではないだろうか。ところが彼らはこの時必要に迫られて難民として逃げ込んだ先で経済活動のチャンスに恵まれ、新しい市場を開拓する結果が生じたと思なすが、最も自然な解釈ではないだろうか。そして彼らがフランスで見いだした経済活動の最大のチャンスとして考えられるのは、何と言ってもシャルル・ダンジューのイタリア十字軍のために、フランス各地の教会で十分の一税を徴収してシャルルの許に届けることであった。恐らく1000人前後のフィレンツェのポポロ階層の人々が亡命しているので、もしもフィレンツェがすでに従来考えられてきたような経済大国であれば、ウルバヌス四世はギベッリーニ都市のシエナの銀行家たちを、破門で脅かしてまで強制的に協力させる必要はなかったはずである。しかしフランス人研究者ジョルダンやレオナルの研究は、この時の金融はあくまでシエナの銀行家を主体として行われたとしており、ナポリに残

されていたシャルル・ダンジューとトスカーナ商人の間で交わされた文書を集めたテルリッツィの資料集³¹⁾にも、私の著書でも検討したとおり、その説を裏付けるような文書が見られるのである。ということは、フィレンツェの亡命者たちは現地にいる有利さを生かし、シエナ出身だが最初から協力を依頼されていた（後にナポリ王国のメイン・バンクとなる）ボンシニョーリ銀行やウルバヌス四世に脅されてシエナを出て来たサリンバーニヤトロメイなどのシエナの銀行家の手足となって協力したと見なすのが妥当ではないだろうか。しかもシエナの銀行家たちの多くは祖国亡命後にゲルフィ党を結成していたから、立て前上すでに敵ではなかった³²⁾したがってこの場合徒手空拳で何の用意もなくフランスに流れ着いたフィレンツェの難民が、かつての敵国民だが今は教皇庁の圧力でゲルフィ党となったシエナの銀行家に協力することで生き延びたと考えるのが最も自然な解釈だと思われる。治安の良くない現地で金銭を調達する事業に加わったため、フィレンツェの亡命者はこの時大いに危険な体験をしたはずだし、ボンシニョーリ銀行以下有力なシエナの銀行との交渉でさまざまな屈辱的な体験を強いられたはずだが、やはり現地で危険な実務に携わった経験は大きく、たちまち実利とともに能力やコネも獲得して、優秀な銀行家に成長し、将来への展望を得ることができたものと思われる。もしもこの時までにはフィレンツェがすでに経済大国になっていたのであれば、商人階層の人々の方がはるかに行動半径が広がったはずで、ルッカくんだりには逃げ込んだりせずに直接フランスなりドイツなりに行ったはずだし、前記のような悲壮な記録が残されたはずがない。

ここで私は公平のために、ナジェミーの『フローレンス史』から自分の説にとって一見不利になる文章を引用しておくことにする。それはベネヴェントの勝利後、プリアーレ制度を基盤としたセコンド・ポポロ体制が成立する以前に約20年続いた騎士階級を主体とするゲルフィ党支配の時代

における亡命者出身の銀行家に関する一文である。

驚くべきことは、権力を握ったのは教皇庁およびアンジュー家と同盟した商人・銀行家ではなかったことである。彼らの会社がシャルルに莫大なローンを与えた家族（主に1267年にそれらの9人がシャルルから騎士の称号を得たフレスコバルディ、バルディ、スカーリ、チェルキ家）の中で、バルディ家だけが、1267年から80年にかけてのゲルフィ党の評議会に定期的に参加している。ゲルフィ党の勝利における決定的な役割にもかかわらず、恐らく多くの人々がアンジュー家のトスカーナ支配を恐れ始めていたために、彼らがあまりにも密接な絆をシャルルと結んでいるという事実が、これらの家々を権力から遠ざけたのだろう³³⁾。

すでに見た通りナジェミーは、ジョルダンやレオナルドやイヴェールらのフランス人研究者の優れた研究成果を無視して、フィレンツェ商人がイタリア十字軍で果たした役割を過大評価している。少なくともテルリツツイの資料集で見ると、シャルル・ダンジューの宮廷におけるフィレンツェの銀行家の存在感は、ボンシニョーリ銀行に代表されるトスカーナの他の銀行家のそれと比較すると取るに足らぬものである³⁴⁾。シャルル・ダンジューが10数年の長きにわたってフィレンツェの領主権（シニョリーア）を委ねられポデスタを派遣し続けたゲルフィ党政権において、その程度の功績よりも亡命先で400騎の騎士団を結成してイタリア十字軍の案内役を務めたことの方がはるかに大きな功績だと見なされていたと考えれば、金融業者がこの時期市政において大して重んじられていなくとも、それほど驚くべき事柄とは思われない。4つの家の9人もの人々が騎士の称号を得たことを特記しているが、1267年という時期を考えれば、それは単なる論功行賞ではなかったことは明白である。まだこの時期にはドイツでコン

ラディンの軍隊によるイタリア奪回計画が進行中であり、トスカーナにもシエナやピサなど強力なコムーネがギベッリーニ党の支配下にあって、ドイツの騎士団の到来を待っている状態だった。シャルル・ダンジューは案外簡単にナポリ王国を制覇したものの、フェデリーコ二世の影響が色濃くのこるイタリア半島では、ギベッリーニ党の勢力が予想外に強く、そうした勢力の巻き返しが必然と感じられている状態であった。事実この翌年の1268年の8月22日、タリアコッツォでコンラディン相手に勝利を収めてようやくシャルル・ダンジューの権力が確定するのである³⁵⁾。したがってポポロの暴動によってギベッリーニ党から解放されたばかりのフィレンツェは、シャルルにとって貴重な同盟国であり、そこにシャルルは一人でも多くの味方を求めていたのである。この場合シャルルは、単なる論功行賞としてではなく、将来のフィレンツェとの絆を強化するために名誉をばらまいたと見なすべきである。

こうしてようやく安泰な王位を獲ち得たシャルルの許に、フィレンツェの商人や職人が押しかけたのは自然の成り行きであった³⁶⁾。何しろ他のコムーネでは考えられないほど多数のポポロ階層の亡命者が、ナポリよりもはるかに遠い地域で何とか生き延びていただけでなく、中には大成功を収めた人々さえいたのだから、国外への出稼ぎは亡命以前に較べてはるかに容易になっていたのである。トスカーナの他の都市では国際商人と一般市民の間の敷居は高かったが、フィレンツェでは敗戦による大量の市民の亡命体験がその敷居を低くしており、やがて一部の市民にとっては国外で稼いで来ることは生涯に一度は体験しておくべき経験となっていった³⁷⁾。実際ヴィッラーニがいろいろな形で証言している通り、モンタペルティ戦争以前と以後とでは市民生活が大きく様変わりしていたのであり、そうした証言が伝えている変化を、一部の研究者が強調しているような、「古き良き時代」という感情に基づくお説教だと見なすわけにはいかないのであ

る³⁸⁾。

ラヴェッジによると、モンタペルティ敗戦後の亡命者の数は約1500人で、当時のフィレンツェの全市民数75000人の2%に当たるとされているが³⁹⁾、大陸や南洋の全植民地を失った直後の日本の全人口はフィレンツェの市民数の1000倍に当たる7500万より少なくはなかったはずだから、敗戦直後の日本に換算すると150万人以上の人々が国外亡命して外地を転々としたことになるであろう。それも平均的な市民ではなくて、プリーモ・ポポロ時代に市政を担当していたポポロの要人たちとゲルフィ党の主な貴族たちとその家族たちからなるエリートの集団であり、ギベッリーニ党の亡命後は勝利者として帰国して繁栄したことを考えると、6年間に及んだこの亡命体験だけでも、その後の市民の気風に重大な変革をもたらしたことは疑いの余地がないであろう。

第二次大戦後の日本に関しても、戦争と敗戦とが国民を鍛えたことは明らかである。かつて私は、中国での戦争から帰還した村の中年のおじさんが、外地で転戦した自分の体験を自嘲的に「官費旅行」と呼んでいるのを聞いたことがあるが、戦争が個人では到底体験できない大移動を行わせることやその体験が人々に新しい知識や能力を与えたことは紛れもない事実である。ある日本史の概説書には「他方、戦時下の軍需工場からの労働者の解雇、700万の復員軍人と150万人の海外からの引き揚げ者などにより、失業者は1000万人を越えた」⁴⁰⁾という記述が見られるが、まさに戦争直後にこれほど多数の人々が厳しい試練にさらされていたのである。特に700万の復員軍人と150万の引き揚げ者こそ、敗戦によって最も鍛えられた人々であった。それは苦難の体験であったが、教育効果も小さくはなかった。そうした教育効果のおかげで、戦後の政治も経済も主に彼らによって実行された、と言っても過言ではあるまい。

残念ながら日本の近現代史に関しても、社会科学に関しても門外漢であ

る私は、太平洋戦争とその敗戦とがいかにかに人を鍛えたかについて、適確に証明するだけの能力が自分には欠けていることを認めなければならない。ここでは一つだけ事例を紹介して敗戦がいかにかに人を鍛えかを示し、将来統計学など本格的な社会科学の手法にもとづいた研究によって、この仮説が学問的に裏付けられるのを待つことにしたい。私が紹介する事例とは、中国引き揚げ漫画家の会が編集した『ボクの満州（漫画家たちの敗戦体験）』⁴¹⁾という書物である。この書物の執筆者は、上田トシ子、赤塚不二夫、古谷三敏、ちばてつや、森田拳次、北見けんいち、山内ジョージ、横山孝雄、高井研一郎という9人の漫画家と石子順という漫画評論家で、その中には石子順のように通常の引き揚げの時代よりも遅れて帰国した人もいるが、全員が満州帰りで、広い意味での引き揚げ者たちである。彼らの何人かは漫画界のスーパースターであり、それほどでなくとも作品名を聞くと、案外ビッグネームであることが分かる人々である。おそらく食うや食わずで満州から引き揚げて来た人々がそれほど大きいとは思えないこの業界にこれほどあつまり、しかもこれほど効率良く大物になっているのは、漫画が戦後に急に多くの読者を得てメジャーになったジャンルで、しかもおかしくなければ、あるいは面白くなければ誰も読んでくれない、親の七光や学歴などとは最も縁遠い、実力本位の分野であることと無関係ではないことであろう。

本文や巻末に掲載されている座談会で、執筆者たち自身、互いの境遇が似ていることに驚き、似たような満州引き揚げ者には自由業者が多いことや、漫画家以外にも立花隆、山田洋次、小沢征爾などの大物がいることが指摘されている⁴²⁾。すでに第一章でも記した通り、他にも五木寛之、畑正憲、宮尾登美子などが加わり、あるいは有馬稲子、加藤登紀子、瀬戸内寂聴、そして新田次郎と藤原正彦の父子など、ほんの少し考えただけで芋蔓式に大物の名前が現れる。ここには記憶力が悪くかつ無知な私がたまたま

「モンタペルティ現象」試論

思い出した名前だけを列挙しただけなので、該当する大物の名前が抜けているのに気付かれた方は、どうか憫笑と共にお許しいただきたい。さらに哲学者の木田元のように満州育ちだが敗戦以前に帰国していた人々を含めると、その数はさらに増大するはずである。これらの名前に共通しているのは、際立った個性とふてぶてしいばかりの存在感であり、まさに日本人離れているという表現がぴったりしている。そういえば今日定年を迎えつつある団塊の世代とそれ以前の世代の最大の違いは、当たり前のことながら、この世代には引き揚げ者がいないという事実である。この世代には赤塚不二夫も山田洋次もひとりもない、という厳然たる事実こそこの世代の最大の限界であるのかも知れない。実際私には、帰国子女はいても引き揚げ者が一人もないという事実が、この世代以降の世代を著しく貧しいものにしていくように思われてならないのである。そしてまさに私が感じているこの貧困さこそ、敗戦がいかにも人間を鍛えたかを裏付けていることなのである。母親に手を引かれて歩いた長い道程は、絶対に無駄なことではなくて、戦後の文化を最も豊かにした肥料だったのである。

こうした意味では、それ以前に強国でなくとも、また敗戦後に幸運に恵まれて国際関係が好転しなくとも、敗戦の苛酷な体験は平等に人を鍛えてくれるはずである。だから亡国の民ですら、その能力と努力と個人的幸運によって成功することは可能である。そして先に挙げた二つの条件の充足度に応じて、モンタペルティ現象が発生する確率は高くなるものと思われる。したがってモンタペルティ現象は意外に頻繁に起きていた可能性は否定できない。

第三章 「モンタペルティ現象」に関するいくつかの問題点

本章では、「モンタペルティ現象」に関する問題点の中で、特に重要だと思われるものをいくつか取り上げて、それについて論じておく。

私は前章において、「モンタベルティ現象」はけっして奇跡などに類した例外的で非合理的な現象ではなくて、むしろ条件さえ揃えば当然起こり得る普遍的で合理的な現象であることを論じたが、実際の歴史においては必ずしもそれほど頻繁に発生しているようには思えない、という疑問が生じるかも知れない。その点に関して、私は主に三通りの仕方で説明することが可能である、と考えている。

まず第一に、私が前章で示した三つの条件は、それほど容易には両立し難いということである。特に第一の条件と第二の条件が両立することは困難である。まず第一の条件、軍事大国として長期に戦い続けるということ自体、多くの国にとって実現が困難である。勿論それは周辺と比較しての相対的な意味においての大国だから、ブリックスに類した本物の大国である必要は全くないが、それでも多くの国々には最初から十分な資格が欠けているのでことであろう。さらにそれ以上に容易に想像できるのは、軍事大国として戦い続けて敗北した国が、その後により有利な国際状況に恵まれるということは、きわめて起こり難い事柄だということである。このように考えると、前章で示した三条件が並立することは、現実にはそれほど頻繁には起こらないことがすぐに分かる。ただし第三の条件は敗戦国のすべてに発生するので、第一と第二の条件が充足している度合に比例して、モンタベルティ現象が発生する確率が高まると考えることが可能なのではないだろうか。

第二に一般的に考えて、前近代の世界の場合、あるいは現代でも前近代並の国家が関係している場合には、モンタベルティ現象が発生する可能性はさらに小さくなるものと考えられる。まだ人権という概念が確立されていない前近代、あるいは現代でも前近代並の国家においては、勝者は敗者に対して恣意的に苛酷な条件を課すことができた。たとえば第二次世界大戦後においてさえ、戦勝国ソ連は国際法を無視して敗戦国であるドイツや

「モンタペルティ現象」試論

日本に対して苛酷な措置を取り、その記憶は今も生々しく残っている。しかし前近代においては、それはごく当然の措置であった。勝利者が敗北した敵の捕虜や占領地の人民の財産を恣意的に略奪し、殺戮した例も少なくないし、結果的に大量の餓死や病死を発生させた例も稀ではなかった。そうした状況の中では、敗者は一個の独立国として存続することすら困難だから、モンタペルティ現象が起り得る可能性は小さかった。実は今日の世界においても、多くの国々は前近代並の国家なので、けっしてそうした状況が終わっているわけではないことは、バルカン半島やアフリカで起っている戦争を見れば明白である。中世フィレンツェの場合は、基本的に同じカトリック教徒である隣国同士の争いであり、勝利者の仲間に有力なフィレンツェ市民が加わっていたことが、戦後の措置を緩和した。それでも敗北後間もないころには都市全体を破壊する計画が企てられた、と伝えられている。その上わずか6年足らずで最大の抑圧者マンフレディ王が戦死して、かわりにフィレンツェを盟友にすることを望んでいるシャルル・ダンジュー王が登場するという幸運に恵まれたので、歴史上最大規模のモンタペルティ現象を実現することができたのである。

歴史の中でモンタペルティ現象を見えにくくしたもう一つの理由は、前の理由とも関連するが、おそらくその現象が発生したことが戦勝国に悟られた場合には、その時点からその進行が妨害されたことと、そうした結果が明らかに予想されるので敗戦国の指導者によってその現象が極力隠されたことである。私たちはそうした妨害の実例を、古代の西欧世界の覇者となり、近代ヨーロッパの土台となった古代ローマの歴史に見ることができ。ローマは共和制時代に地中海のかなたの大国カルタゴと死闘を繰り返し、これを倒して地中海の覇権を奪うことができた。ポエニ戦争とよばれるこの戦争は周知のごとく三度にわたって戦われたが、実際にはカルタゴの英雄ハンニバルがイタリア半島に攻め込んだ後に約20年近く続いた第二

次ポエニ戦争で勝敗が決していた。紀元前202年のザマの戦いで敗北した後、カルタゴ人は莫大な賠償金を課せられたが、必死に奮闘して予想外に短い期間に賠償金を全額支払い、そのためかえってローマ人の疑惑を招いたと伝えられている。おそらく第二次ポエニ戦争後のカルタゴでは、モンタペルティ現象が発生したものと思われるが、そのさらなる発展を恐れたローマは、カルタゴが元の大国に戻ることがないように、カルタゴ市街を徹底的に破壊して塩を撒きその存在に止めを刺した¹⁾。

このようにモンタペルティ現象が発生した場合、戦勝国がそのことに気付くと改めて攻撃し、極端な場合には地上から抹殺してしまう恐れがあった。勿論敗戦国の指導者がこのことを予測しないはずはなく、可能な限りそうした事実を隠そうとしたに違いない。カルタゴにおいても、指導者層の間では当然こうした懸念が生じたはずだが、うまく隠しおおすことができなかったために破滅したのである。あるいは両雄並び立たずという諺があるように、カルタゴは早晩破壊される運命にあったのかも知れない。いずれにしても前近代世界にあっては、モンタペルティ現象が発生した敗戦国の指導者と国民は、極力これを隠そうとしたはずである。指導者と国民が賢明であればあるほど、その国で発生していた経済的、文化的繁栄は隠されたに違いない。だから今日のようなメディアが存在していない時代には、たとえモンタペルティ現象が発生していても報道されることはなく、結果的に全く記録されずに終わった可能性は否定できない。とりわけ記録された資料だけで過去を再現しようとする近代的な歴史学では、そのような隠された現象を発見する可能性は小さい。むしろフィレンツェのように、前近代にありながら、この現象が記録を通して再現できること自体全く例外的なケースなのである。したがって前近代においても、小規模なモンタペルティ現象が案外繰り返し発生していた可能性は否定できない。

第二の問題点として強調しておきたいことは、敗戦一般とモンタペルテ

「モンタペルティ現象」試論

イ現象が敗戦国のその後の時代に及ぼす影響の重大さである。第一章で記したとおり、私はモンタペルティ現象に関する仮説を提起した際、敗戦をフイレンツェ発展の重大の契機と見なしたことに対して、因果関係として明らかに矛盾しているのではないかという指摘を受けたことがある。しかし敗戦によって齎されるさまざまな改革がその国の将来に深い影響を及ぼし、そのことが発展の契機となり得ることは、矛盾しているどころか、十分合理的に考えられる事柄である²⁾。また実際勝利よりも敗北の方が、ある国に対して深刻な影響を及ぼす可能性が高いことは、いくつかの実例に当たれば容易に推察できる。たとえば日本の近現代史において、日清、日露の両戦争の勝利の影響と第二次世界大戦の敗北の影響とを比較して、後世に及ぼした影響がどちらがより深刻であったかを考察するだけでも、敗北の影響の重大さは十分想像できるはずである。さらに忘れてはならないことは、敗戦の影響が半永久的と呼べるほど長期に及ぶ可能性があるということである。極端な例を挙げると、ユダヤ人のように敗戦の結果国民全体が亡国の民となって世界をさまようことさえあり得るのであり、この一例からだけでも、敗戦の影響が勝利の影響とは比較にならないほど重大な結果を齎す可能性があることを認めなければならないであろう。私の考えでは、これまでの歴史学は敗戦の影響について客観的に把握する試みが乏し過ぎたように思われてならない。もちろん個々の敗戦については、これまでに膨大な研究が行われており、その帰結としての影響についても必ず言及されてきたことは否定できない。しかし私は個々の敗戦の過程とその影響に関する研究成果をさらに客観化し、一般化して論じる試みが不足していたのではないかと考えるのである。私はそうした敗戦の影響の一つのモデルとしてモンタペルティ現象という仮説を提出し、その是非を問おうとしているのである。

すでに述べたように敗戦の影響は長期に及ぶのであるが、モンタペルテ

イ現象の場合もその例外ではない。それどころか私は、この現象が回復不可能な亡国をもたらす致命的な敗戦（その場合は影響は永久に続く）ほどではなくとも、少なくとも国民に塗炭の苦しみを及ぼす苛酷な敗戦に全く劣らぬほど、長期にわたって影響を及ぼす可能性がある、と考えているのである。しかも長期にわたる占領や略奪や賠償などで貧困に苦しむ敗戦とは異なり、なまじ発展や繁栄を伴っているだけに、市民自体敗戦の影響だと自覚できないまま行動しているところに、この現象の影響の特異性があるものと思われる。

私の見るところ少なくとも14世紀のフィレンツェ史には、この現象の影響と見なす以外に説明が不可能な大事件が二度起きている。その一つは、1302年ダンテやペトラルカの父のペトラッコがフィレンツェから追放された白黒闘争であり、もう一つは1342年に共和制の伝統の強いフィレンツェ市民が、自らの発意でナポリ王の家来を招いて終身君主に祭り上げたと伝えられているアテネ公の独裁支配である。以下でそれらの事件を検討して、そこにモンタペルティ現象の影響が認められることを論証することによって、その影響がいかに長期に作用するかを示したい。

まず白黒闘争についてであるが、この事件の経過は、ディーノ・コンバーニという同時代の大家政治家によって『(白黒)年代記』が記され、自ら経験したヴィツラーニもくわしい記録を残し、ダンテを初めとする多数の関係者に関しても、その欠席裁判の記録などの資料が残っていて、1302年という時代からは信じられないほどの文献資料に恵まれている。さらに19世紀にはイシドーロ・デル・ルンゴがそれらの文献を近代歴史学の手法で徹底的に洗い直し大著『白派と黒派』としてまとめ上げ、さらにダンテ研究者によって再三再四吟味されているので、大きな変更の余地はあり得ない³⁾。当時のフィレンツェは、銀行家のチェルキ家を中心として大地主カヴァルカンティ家に代表される有力市民やダンテなどのグループが主流

「モンタペルティ現象」試論

派として統治していたのであるが、その勢力下にあった小都市ピストイアで白派と黒派の紛争が発生し、仲裁のために両派の代表をフィレンツェに引き取ったことから、フィレンツェにもその紛争が伝染して、ダンテもその一員だった主流派が白派を、それに対抗して古いゲルフィ党の貴族コルソ・ドナーティや有力銀行家のバルディ家らの反対派が黒派を形成して、抗争が始まった。1300年に争いが激化したため、市政府はコルソやグイド・カヴァルカンティら両派の過激分子を追放したが、争いは収まらず、それを知った当時の教皇ボニファティウス八世が調停に乗り出そうとした。チェルキ家の当主ら白派のリーダーがその提案を拒否したため、教皇はこのころアンジュー家のシチリア奪回を応援しにナポリ王国に来ていたフランス王子シャルル・ド・ヴァロアの率いる500騎をフィレンツェに派遣した。するとこの軍隊に続いてコルソら黒派の亡命者がフィレンツェ市内に入城し、それに呼応して民衆の暴動が勃発、騒乱が6日間も続いたために白派政権は崩壊し、その主なメンバーはフィレンツェから亡命して、黒派が政権を奪取した⁴⁾。

この紛争は、経緯がかなり細部まで分かっているにもかかわらず、その歴史的意味の解釈に関しては定説がない点がユニークである。フィレンツェ史の権威オットカールやサルヴェーミニはその主要な研究テーマを13世紀に限定することで言及を避け、ダーヴィットゾーンはボニファティウスの特異な権力欲に主要な原因を求めている⁵⁾。比較的近年にこの紛争を論じたパレンティは、「(「正義の規定」によって)すでに市政から疎外されていたマニャーティ(閥族)同士の争いがフィレンツェ市内で新しい支配階級の大部分を巻き込むことに成功したという事実は注目すべき事柄だ⁶⁾」とコメントしている。つまりパレンティは、その展開の意外さに驚いているわけである。さらにパレンティは、「たしかに私たちは、1280年から1295年までの年月を特色付けて来たフィレンツェの政治闘争に比較し

て、白派と黒派との激しい一連の復讐戦は実際「時代遅れの」紛争だということができる』⁷⁾として、明らかに階級闘争史観に基づく大胆な切り捨てを行っている。結局パレンティにとって、閥族がフィレンツェ統治に参加することを禁止し、彼らの暴力に厳しい罰則を課した「正義の規定」をめぐる13世紀の紛争は階級闘争史観に符合する良い紛争であり、白黒闘争は閥族同士の抗争に過ぎないから時代遅れの悪い紛争だったということになるわけで、要するに白黒闘争はその意味を考察するに価しない時代錯誤的な事件だとして解釈を放棄していると見なすことができるであろう。しかし実際には必ずしも厳密に遵守されたとは思えない「正義の規定」をめぐる紛争と比較して、白黒闘争がそれほど軽視できるものとは思えない。数年後に首謀者のコルソ・ドナーティが失脚するなどという修正が加わるが、結局この紛争で権力を握った黒派の子孫がその後のフィレンツェ共和国の指導者であり続けており、この闘争の勝利者の中からデッラ・トーサ家、アルビッツィ家、メディチ家などといった将来のトップ・リーダーが現れるのである。少なくとも指導者層の交代という点で、この闘争は測り知れないほど深い影響を残した⁸⁾。

2006年に刊行されたナジェミーの『フィレンツェ史 1200-1575年』では、この紛争はパレンティほど単純には切り捨てられてはいないが、その論調はやはり疑問符に満ちている。ナジェミーもパレンティ同様白黒両派を構成する主要な階級を吟味してどちらの派にも貴族、上層市民、庶民が一式揃って混じっていることを確認した後に、「しかし、主にバルディ家やスピーニ家などといった銀行家の家族が、なぜ商人でもない（つまり貴族という意味）ドナーティ家に派の主導権を握らせたのかを想像することは困難である」⁹⁾という疑問の念を表明する。この一文によって、ナジェミーがパレンティと同様一種の階級闘争としてこの紛争を見ようと試み、結局それが無理であることを認めていることが分かる。しかしギルド（ア

「モンタペルティ現象」試論

ルテ)の歴史や実情にくわしいナジェミーは、白派の指導者がシャルル軍の到来を拒否するために、当時の主要な21のギルドではなく、日ごろ市政には加われなかったものも含めて、何と72ものギルドの代表の意見を求めたという興味深い事実を伝えている。その際、はっきりと反対を表明したパン屋のギルドだけが唯一の例外で、それ以外のすべてのギルドの代表はシャルルの軍隊を受け入れることに賛成した¹⁰⁾、と記している。その結果フィレンツェは黒派を援護するシャルルの部隊を受け入れざるを得なくなり、白派の失脚が決まったということになる。要するに白黒闘争などと呼ぶと分かりにくい、外国の軍隊を利用したクーデターだったと考えると、決して理解できない事件ではない。ナジェミーの記述はこの点をはっきりさせた点で評価し得る。

しかし先に引用した文章でも明らかな通り、一応市民の支持を得て市政を担当していたはずの白派の政権がなぜかくも簡単にクーデターで倒れたのかとか、あるいは72のギルドの内71までが、白派の期待していた通りシャルル・ド・ヴァロアの部隊を拒否しようと提案しなかったのかといった疑問は、バレンティらが選んだ階級闘争という視点からでは全く理解できないのである。ところがそこに当時のフィレンツェ市民が強くその恩恵に浴していたモンタペルティ現象の存在を補助線に加えるならば、この時のフィレンツェ市民の行動は全然意外なものではなくなる。モンタペルティで完敗を喫したフィレンツェは、教皇庁が企画してフランスの王子シャルル・ダンジューが実行したイタリア十字軍の成功のおかげでギベッリーニ党の支配から解放され、シャルルが王として君臨するナポリ王国と教皇庁とシャルルの母国フランスとを結ぶ枢軸の一員として受け入れられ、両国とその周辺に進出することで経済的大発展を体験しつつあったのである。したがって教皇がナポリ王国から派遣したフランス王子の率いる軍隊となると、まさに恩人たちのグループの集合体のような意味を帯びていたので

ある。だからフィレンツェ共和国には、この訪問を断ることなど到底無理だった。唯一の例外であるパン屋をも含めて、すべてのギルド要人たちはフィレンツェと教皇庁、ナポリ王国、フランス王国との関係の重要性を理解していたはずであり、その関係を傷付ける可能性がある行為を避けようとしたのである。

6日間続いた暴動は勿論群集心理の現れに他ならないが、白派が従来のゲルフィ党の協調路線から外れて、安易に単純過ぎる自主独立路線を進んでいることに対する危惧の表明という側面があることは否定できないはずである。だからこの闘争は、従来の外交関係を維持してモンタペルティ現象を貪欲に利用し続けるか、それとも白派の方針に従って教皇の干渉を排除し、正義を完遂するか、という選択に関する一種の路線闘争であったと見ることができる。従来の路線によって最も恩恵を受けて来た金融業者が、ゲルフィ党の首領である貴族を一時的にリーダーに担いだことが、どうしてそれほど意外なのか、ナジェミーの疑問自体がむしろ私などには理解し難い。自分たちとその子孫の未来が懸かっている以上、市民の多くが熱狂的に参加したとしても少しも意外ではない。モンタペルティ現象を体験したフィレンツェ市民にとって、実情はともかく、少なくともこのころまで局外者には協調関係を維持するかに見えたフランス王—ナポリ王—教皇庁という三者が共同して派遣した軍隊とあれば、断りようがなかったとしても決して意外ではない。皮肉なことに、なんとそれから二年足らずの内にアナーニの屈辱事件が発生してボニファティウスとフランス王フィリップ美王との不和が天下に知れ渡り、教皇は憤死するのだが¹¹⁾、まだこの時期にはフィリップの弟シャルルはボニファティウスの指示に忠実に従って行動していたのである。モンタペルティ現象の恩恵にどっぷり浸かっていたフィレンツェ市民にとって、これら三つの権力の集合体に逆らうことがいかに困難だったかを、71のギルドのリーダーの解答が示している。

「モンタペルティ現象」試論

この紛争をパレンティは時代遅れの闘争と軽視し、ナジェミーも解釈に苦しんでいるが、それはそれ以前のフィレンツェの歴史の経過を十分考慮していないために他ならない。モンタペルティの敗戦の影響を正しく評価しておれば、極めて自然にこのクーデターの意味が理解できるはずである。たしかに前近代から近代への歴史を進めた要素として階級闘争は重要であったが、歴史を動かしているのは階級闘争だけではなく、民族性や宗教は勿論個々の事件や偶然も影響し得るのであり、とりわけ勝利や敗戦の影響は国民全体の生活を直撃するため、決して小さくないのである。

14世紀のフィレンツェで、モンタペルティ現象の影響が認められるもう一つの事件は、ヴィッラーニ自身が「大変特異なので、それに立ち会った作者の私にも、後世の人々が果して真実と信じてくれるかどうか疑わしい」¹²⁾と書いているほど奇妙なアテネ公を独裁者に選んだ政変である。この事件には二つの伏線があり、その一つはスカーラ家から25万フィオリノで支配権を買い取ったはずのルッカを、ピサによって武力で奪いとられたことへの民衆の怒りであり、もう一つは当時百年戦争の影響で三大銀行が倒産に直面するなど、フィレンツェ経済が危機に瀕していたという事実であった。こうした危機的状況に対処するために、フィレンツェ市民が選んだ方針は、ナポリ王の家来でカストルッチョ戦争の時に一時カルロ王子の代理をつとめたアテネ公グアルティエーレ・ディ・ブリエンヌを招聘することで、当時の政府は彼をルッカ奪回の戦争の指揮官として招いたつもりだったのに、アテネ公自身が領主に就任することを宣言し、これに民衆が呼応したため、政府は交渉を通じて一年間だけ支配権を任せることを許した。だが市民総会が開かれると民衆の間から彼を終身領主に推薦する声が止まず、アテネ公はその声におされて終身領主として君臨することになる。しかし彼は勝手にピサと協定を結んでトスカーナの盟主におさまり、フィレンツェのルッカ奪回は実現せず、さらにアテネ公とその家来の日常

の横暴ぶりが市民を憤激させ、一年足らずで暴動が発生して、アテネ公は君主の座を追われてしまったというのがその経緯である。

この事件に関しては、短期間で終わっている上に後代への影響も乏しいので、19世紀のパオーリの研究¹³⁾以後は論文らしい論文は書かれていないようである。ナジェミーはその『フローレンス史』の「5 14世紀 力の対話」の二つ目の節「1340年代の危機と三度目の人民的政府」の中でこの事件を取り上げているが、ヴィッラーニを驚ろかせた終身領主就任の経緯については全く触れていない。ただ英仏間の戦争のためにバルディ銀行を初めとする多くの銀行が危機に瀕していたことと、それにもかかわらず上述の25万フィオリノに加えてさらに40万もの強制国債を課されて来たことなどを記した後、エリートたちは「特権的な外国人の手中に大幅な権力を持たせることを選び」、「彼らの会社を救うために必要とされる必然的に不人気となる政策を実行させることを望んで」¹⁴⁾、アテネ公ブリエンヌを招いたと記している。だがアテネ公には彼独自の思惑があって、エリートたちの望む政策を実行しなかったために地位を追われたのだと説明している。ナジェミーはアテネ公がエリートの意に反して、小ギルドや賃金労働者に様々な配慮を示し、フィレンツェの守護聖人の祭日に労働者の行進を許した事実を指摘して、ヴィッラーニやマキアヴェッリよりもアテネ公にずっと好意的な評価を下している点が興味深い¹⁵⁾。

ナジェミーの記述に対する私の最大の疑問点は、銀行家たちがブリエンヌをフィレンツェの独裁者として招いた、と単純に断定していることである。ただ倒産の危機が迫っていたという理由だけで、彼らがアテネ公を独裁者に担いだと断定するのはあまりにも短絡的である。第一いかに銀行家の影響力が大きいからと言って、彼らが主に市外で活動していることを考慮すると、市民総会で下層民たちを激高させてアテネ公を終身領主に祭り上げさせるだけの影響力があったとは到底考えられない。それに銀行家た

「モンタペルティ現象」試論

ちが独裁者に何を求めていたかも、具体的なことは全く明らかではない。単なる免税を求めたのか、それとも倒産を免れるために、共和国の金庫から彼らの銀行に資金を注入させようとしたのであろうか。いずれの場合にせよ当然そういう動きがあれば記録されるはずだが、アテネ公はやたらと私腹を肥やしたという記録しか残っておらず、銀行家たちと何らかの具体的な交渉があったとは記録されていない。そして一年足らずでアテネ公打倒に立ち上がった仲間に、バルディ家やフレスコバルディ家等の有力銀行家が真っ先に加わっていたのである¹⁶⁾。免税であれ資金の注入であれ、何らかの魂胆があれば、少なくとも打倒の動きに真っ先に加わることはないであろう。そうした目的のためには、相手が貪欲に金を蓄えていた方が取引しやすいからである。それに資料から見ると、下層民たちは銀行家に扇動されたためではなく、あくまで自らの意思で激高していたとしか考えられない。だからこそヴィッラーニも極めて異例な出来事であると見なしたのである。アテネ公独裁の支援者に有力銀行家たちが加わっていたことは古来誰もが認めて来たことであるが、ナジェミーの記したように彼らの意思だけでこの事件が発生したとはとても考えられず、これはあくまで市民全体を巻き込んだ事件だったことを忘れてはならない¹⁷⁾。

私はこの事件に関しても、モンタペルティ現象の影響を抜きにしては説明不可能だと考えるものである。すなわちこの現象の影響によって、フィレンツェでは危機が起こり次第ナポリ王国に依存する習慣が生じていた。とりわけ軍事的な危機が生じた場合には、ナポリ王国に依存してきたのである。この事件の場合も銀行の危機以上に大きな原因として、ルッカをめぐる軍事問題があった。25万フィオーリーノもの大金をスカラ家に払い込んだにもかかわらず、ヴィスコンティ家の軍事的支援を受けたピサによってルッカを掠め取られ、その後マラテスタ家の傭兵隊長などに金をしぼり取られるばかりで、ルッカを獲得することはできなかった。銀行の危機な

どとは無関係に、ルッカをめぐる市政府の不手際が民衆の怒りをかきたてて来たのである。そしてベネヴェント戦争後のフィレンツェは、こうした場合の切札としてナポリの王権に依存し続けてきた。古来民主的な共和制の伝統を誇ってきた共和国としては信じ難い事実だが、1266年のベネヴェント戦争以後、1328年のカストルッチョ・カストラカーニ戦争の終結までの63年間の内、1267-80年、1313-21年、1325-28年と3分の1をはるかに越える通算約24年間にわたって、いずれもアンジュー王朝の君主たちシャルル・ダンジュー王、ロベルト・ダンジュー王、カルロ皇太子に領主権を委ねてきたのである¹⁸⁾。だから当然この時もナポリ王国に依存しようとしたが、1278年生まれのロベルト王はすでに64歳と、当時としては高齢であり、1325年当時ですら皇太子を派遣していたほどだから、とても領主就任を依頼できず、その皇太子も1328年に死去して空位になっていたのだから、1325年当時カルロ皇太子の代理を務めていたアテネ公に白羽の矢が立ったのはむしろ当然な成り行きだったのである。ただし1328年以後10数年間はカルロが死去したためそうした試みが行われておらず、人々の記憶も薄らいでいた。おそらくそのためかえてこの手段への期待は高まっていて、そのことが民衆の熱狂を引き起こした可能性が認められる。いずれにせよ一時的とは言え、外国の君主に領主権を引き渡すという行為は極めて異常だと言わざるを得ないのだが、13世紀後半から14世紀初頭のフィレンツェではこうした行為が常習化していたのである。これはモンタベルティ現象を抜きにしては絶対に考えられない行為であり、このこと一つ取っても、この現象を無視してはフィレンツェ史を理解することは不可能であることが分かるはずである。アテネ公の事件は、状況が一変している中で旧来の手法に頼ろうとしたために、共和国自体が自ら進んで被害者になった一種の詐欺事件のような事例だと見なすことができるであろう。

現代日本におけるこれに対応する怪事件となると、1960年と70年前後の

「モンタペルティ現象」試論

日米安保条約をめぐる異常な盛り上がりを見せた闘争と、1976年に日本政界における最大の実力者田中角栄を逮捕に追い込んだロッキード事件が考えられる。いずれも周知の事件なので深入りする必要はないと思われるが、共に戦後の発展に関して最大の恩恵を受けたアメリカが関係し、日本の防衛問題とも関連していることが否定できないであろう。たとえば安保闘争の異常な盛り上がりは、それが一見日本の将来の路線を左右する闘争のように見えたためだが、日本国民が現実には軍事的に依存しているアメリカとの同盟に反対する、いわばフィレンツェで言えば白派の立場からの闘争だったために、シャルル・ド・ヴァロアに当たる支援者は現れず、派手に騒いだ割には影響は乏しく、闘士たちの多くは転向して企業戦士として日本経済の発展に協力することになった。その点で岸首相のアメリカの保護の下での発展を望む、「声なき声」に支持されているという判断は正しかったのである¹⁹⁾。ともかくフィレンツェでモンタペルティ現象に最も関係が深いナポリ王国がらみの怪事件が発生しているように、日本のモンタペルティ現象に最も関係の深いアメリカがらみの怪事件やクーデターが発生する可能性が最も高いことは、当然といえば当然なのである。

この事件とそれを引き起こす基になったナポリ王国への依存は、この現象がもたらす最も深刻な影響を私たちに示唆してくれる。それはこの現象が軍事大国からの転換の結果として発生するために、それを体験した国民の軍事離れを引き起こし、国防力を著しく弱めるとともに、可能な限り外国の軍事力に依存しようとする習性を生み出すことであり、敗戦後に国民の間で強力な厭戦気分が高まり、その気分を制度化して定着させようとする試みが生じることである。フィレンツェで発生したそうした制度化の試みの一つが、このアンジュー王朝への依存であった。モンタペルティ敗戦によって、当時のヨーロッパ世界における最強の軍隊だと信じていたドイツ騎士団を、ベネヴェントとタリアコツォで二度も破ったフランス騎士

団を主体とするナポリ王国軍は、フィレンツェ共和国にとって十分頼り甲斐のある軍隊に見えたのである。だからかつてトスカーナ地方であれほど猛威をふるったプリーモ・ポポロの軍隊は、カンパルディーノの戦いの際に、一応類似の組織が再建されたはしたものの、長く持続することはなかった²⁰⁾。その後も時たま再編されることはあったようだが、もはやポポロにはかつての戦闘意欲は消えていた。たとえば1290年代には、勝ち戦だったにもかかわらず、ポポロが主導してピサ攻略を休戦にもちこんだとされている²¹⁾。

近現代の世界と中世イタリアとは大きく事情はことなるが、第二次世界大戦後の日本でも、中世フィレンツェに起こったのと極めて似た事態が発生した。フィレンツェはゲルフィ党とポポロを救い出したナポリ王国に軍事的に依存したが、日本は軍事的には戦勝国アメリカにさらに徹底して依存し続けている。日本でも戦争直後の厭戦気分から始まって、占領軍の指導下で生まれた日本国憲法がその厭戦気分を制度化した。占領下にあったせいもあるが、国防に関して全く配慮しない憲法に対して、日本では激しい反対は生じなかった²²⁾。その憲法に従った結果、日本は60年間対外戦争を行うことがなかった。日米安保条約に依存することで、世界最強と信じるアメリカの軍事力の庇護の下、外国からの大規模な侵略を受けることはなかった。しかし北方領土問題を初めとするロシアや韓国や中国との領土問題、いくつかの国による漁船の拿捕問題、北朝鮮による拉致問題等、国益を侵害されることは稀ではなく、たとえ侵害されても対処する方法が限られているため、結果的には放置したままであることも少なくなかった。フィレンツェはかつてプリーモ・ポポロ時代には自らの支配下にあったはずのアレッツォの挑戦を受けて、フランス人の指揮下でカンパルディーノの戦いに辛うじて勝利したが、日本はかつて植民地だった国々からさまざまな侮辱を受けても戦うことはなかった。だから日本はフィレンツェ以上

に戦争離れしたと言える。

モンタペルティ現象はフィレンツェでは、経済的、文化的大発展を齎し、日本でもいろいろな側面での発展を齎しつつある。しかし物事には必ず表裏があり、プラスの影響だけを齎すことはあり得ない。フィレンツェの場合は、マキアヴェッリが嘆いた軍事的な弱さや傭兵への依存という形で、その後市民を悩まし続けることになる²³⁾。恐らく日本の場合でも、この現象の影響はそれと類似した弊害を次々と齎すことを覚悟しておかねばなるまい。

注

第一章

- 1) 米山喜晟、『敗戦が中世フィレンツェを変えた』、東京 2005、参照。
- 2) 前注の著書の171ページ。近年この分野の研究がすすんでいるので、統計資料等に修正が加えられているはずだが、基本的な解釈を変更する必要はないものと思われる。
- 3) ブルネット・ラティーニに関する記述は、*DIZIONARIO CRITICO della LETTERATURA ITALIANA*, Vol. II, Torino 1974, pp. 361-364 の記述に基づく。翻訳者をポーノ・ジャンポーニとする説は同書363ページ。
- 4) ダンテの *Convivio* は4論文から成るが、その第一論文の大半、V-XIII章は何故カンツォーネの解説がラテン語ではなく、俗語（イタリア語）で書かれねばならないかを論じている。
- 5) E. R. クルティウス、南大路他訳、『ヨーロッパ文学とラテン中世』、東京 1972、41-2 ページ。
- 6) H. Baron, *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton, New Jersey 1966.
- 7) ヴァザーリはその『(芸術家) 列伝集』の第一巻をチマブーエから書き始め、7番目に取り上げたジョットにこの時代としては最も長い紙数を当てている。
- 8) J. M. Najemy, *A History of Florence, 1200-1575*, 2006 Malden etc., p. 28.
- 9) J. M. Najemy, op. cit., p. 96.

なお13世紀後半のフィレンツェ商人の国外進出ぶりは、A. Saponi, *Studi di Storia Economica, Vol. I, II, III*, Firenze 1982 etc. 所収の諸論文, *Storia interna della compagnia Peruzzi* (Vol. II) や、E. Fiumi, *Fioritura e decadenza dell'economia fiorentina, parte I*, in “*Archivio Storico Italiano*”, Anno CXV, Firenze 1957 (Disp. I) などでも論じられていて、もちろん例外はあるが、最初に活動を始めた時期はかなりこの時代に集中している。

- 10) AA. VV., *Renaissance*, New York etc. 1962, に収録された論文, R. S. Lopez, *Hard times and investment in culture*.
- 11) F. Renouard, *Storia di Firenze*, tr. D. Beccato, Firenze 1967, p. 21.
- 12) この戦争に関しては、フィレンツェ側とシエナ側の資料が大きく食い違っており、近代イタリアの歴史学は双方の資料を比較検証してその経過を推測している。近年に提起された新しい成果をも含めて、私は注1)の著書の第一章第四節でその要旨を紹介した。
- 13) ヴィッラーニの『年代記』の第6巻第65章に記されたこの事実は、なぜかしばしば無視されており、ナジェミーも触れていないようだが、高位聖職者を処刑したためにモンタペルティ戦争当時、フィレンツェのプリーモ・ポポロ政權とローマ教皇庁との関係は断絶しており、敗戦を天罰だと見なす説も出るほどであった。だから当時のフィレンツェを単純に教皇庁に忠実なゲルフィ党の都市だと見なしてはならない。またこの事実がその後のフィレンツェのローマ教皇庁との関係に重大な影響を齎し続けたことも確実である。
- 14) R. Antonelli e S. Bianchini, *Dal Clericus al Poeta*, in “*La letteratura italiana Vol. II, Produzione e consumo*”, Torino 1983, p. 212 の表参照。
- 15) P. Bondanella & J. C. Bondanella, *Dictionary of Italian Literature*, Connecticut 1979.
- 16) 『モンタペルティ・ベネヴェント仮説——中世フィレンツェの驚異的發展の謎に挑む——』, 大阪 1993, および本章注1) 参照。
- 17) たとえば、G. ブロカッチ著、豊下楯彦訳、『イタリア人民の歴史』II, 東京 1984, 318ページ以下には「経済の奇蹟とイタリア共産党」という一節がある。イタリアから刊行された他の戦後史にも、常に il miracolo economico という章が設けられている。

第二章

- 1) Y. Renouard, *Les villes d' Italie fin du X^e siecle au but du XIV^e siecle*, Tome 2, Paris 1969, p. 269. ただしルネサンス時代の人文学者の中には、帝政の先駆者カエサルによる創建を嫌い、スラの時代にさかのぼらせようとした学者もいた。マキアヴェッリなどは、山上のフィエーゾレが不便なので、平地に自然発生的に現れた市場がやがて都市に発展したと説明している。
- 2) R. Davidsohn, *Storia di Firenze*, Firenze 1973, Vol. I, Cap. IX, pp. 636 sgg.
- 3) G. ヴィツラーニ, 『年代記』, 第6巻第3章。
- 4) 同上, 第33章。ただしゲルフィ党が追放された時点でかなり激しい戦闘が行われたことも事実で、フェデリーコ二世の権威が低下していたことは明らかである。
- 5) 同上, 第38章, 第39章。ただしヴィツラーニはプリーモ・ポポロの成立を1251年7月のことだと記している。それだとフェデリーコの死後となる。いずれにしてもすでにフェデリーコの権威が失墜した後のことである。
- 6) 第一章注1) の私の著書の第一章第三節参照。
- 7) R. Davidsohn, op. cit., Vol. II II, Par. I, Cap. VI, p. 555.
- 8) J. M. Najemy, op. cit., p. 70.
- 9) Dante Alighieri, *Purgatorio*, XI, 109-114.
- 10) 自分は昭和史の門外漢ではあるが、これまでも興味を持って自分なりの昭和史を構成して来た。以上の要約は、近年の概説書、たとえば有馬学, 帝国の昭和, 東京 2002, 北原敦編, イタリア史, 東京 2008, 木村鯖二編, ドイツ史, 東京 2008, その他を参照して、そこに記された史実と大きなへただりがないことを確かめながら、自分の見解をまとめたものである。
- 11) 同上。河野康子, 戦後と高度成長の終焉, 東京 2002, その他。
- 12) いずれも力の空白を利用する意欲に駆り立てられている。規模は大いに異なるが、プリーモ・ポポロらのモンタペルティ戦争を推進した過程と、日本の軍人たちが中国戦線を拡大した過程は似ている。
- 13) Dante Alighieri, *Inferno*, X, 91-3. ヴィツラーニの『年代記』, 第6巻第81章にはさらにくわしくその模様が記されている。
- 14) たとえば J. M. Najemy, op. cit., pp. 72-6 の「アンジュー家との同盟」の節ではそうした事実が強調されている。
- 15) ナジェミーの記述だけを読むと、フィレンツェの銀行家たちがシャルル・

ダンジューの財政支援を一手に引き受けたような印象を受けるが、以下に示すとおり、その主役はシエナの銀行家であって、フィレンツェの銀行家はあくまで補助的な役割を演じていただけであった。

- 16) このあたりの事情は、E. Jordan, *LES ORIGINES DE LA DOMINATION ANGEVINES EN ITALIE*, New York 1960 (Paris 1909) などにくわしい。ウルバヌス四世とシエナの銀行家の交渉については、同書の338ページ以下で記されていて、ウルバヌスがシエナをトスカーナの諸悪の根源だと非難し、その銀行家に教皇庁に協力するか否かの二者択一を突き付けた結果、1262年12月初頭に銀行家のシエナからの大量脱出が発生し、この時シエナを去った金融業者が26家に上り、それまでシエナに存在しなかったゲルフ党を結成したとされている。もしもフィレンツェの銀行家たちに十分な力があれば、何もわざわざ当時ギベッリーニ党の牙城となっていたシエナの銀行家に対して、このような働きかけをする必要はなかったはずだし、シエナの銀行家もただ脅しだけで行動したはずはない。その冒険と犠牲に値する利益が見込まれたから取り引きが成立したに違いないのである。こうした大きな取り引きが成立していた以上、フィレンツェの金融業者にはそのおこぼれしか回ってこなかったと考えるべきではないだろうか。ボンシニョーリ銀行が全事業の約半分の借金を担当したと記しているのはジョルダンの前掲書の545ページであり、テルリッツィの資料集の文書を見ても、この銀行がシャルル・ダンジューから別格の扱いを受けていたことを、私は自分の著書の第三章第二節で論証した。同銀行の活躍を証言しているのはフランス人の学者だけではなく、スティーブン・ランシマンの名著『シチリア晩祷事件』の見方に修正を試みている N. Housley, *THE ITALIAN CRUSADES The Papal-Angevin Alliance and the Crusades against Christian Lay Powers 1254-1343*, Oxford 1982 の227ページなどでも強調されている事実である。ランシマンがシャルル・ダンジューの活動の財政面にはあまり触れていないのは、すでにジョルダンらの詳細な研究が存在したためだが、ハウスリーはその面を洗い直している。しかし第二次大戦末期のドイツ軍の破壊で、この面でジョルダンの成果を越えることはできなかったようである。いずれにせよフィレンツェの繁栄を安易に論功行賞に結びつけてはならないことは、私がこれまで論じてきたことから明らかである。

- 17) E. G. Léonard, *GLI ANGIOINI DI NAPOLI*, tr. R. Liguori, Varese 1967

- (Paris 1954) G. Yver, *LE COMMERCE & MARCHANDS DANS L' ITALIE MERIDIONALE AU XIII^e & XIV^e SIÈCLE*, Paris 1903.
- 18) S. Terlizzi, *DOCUMENTI DELLE RELAZIONI TRA CARLO D' ANGIÒ E LA TOSCANA*, Firenze, 1950.
- 19) ヴィツラーニ, 『年代記』, 第7巻, 第14-5章。
- 20) R. Davidsohn, op. cit., Vol. III, II, P. II, Cap., VIII, pp. 64 sgg. さらにこの戦争後700年目を記念してコッレ・デイ・ヴァル・デルサのコムーネ(町)から委嘱されたバスティオーニが, その経過を記述している。C. Bastioni, *La battaglia di Colle, Colle di Val d' Elsa* 1970.
- 21) フィレンツェはこれ以後軍事的にはナポリ王国に依存し, 精神的・文化的には教皇庁に依存し始める。フェデリーコ二世の死後20年にも満たないイタリアでは, ギベッリーニ党の勢力が根強いので, グェルフィ党のフィレンツェはフランス, ナポリ王国, 教皇庁の三者から好意的に受け入れられたことは容易に想像し得る。
- 22) たとえば河野康子, 前掲書, 90ページのアメリカの懲罰的講和の再検討など。
- 23) ジョン・ダワー(三浦・高杉, 田代訳), 敗戦を抱きしめて(増補版), 東京 2004はこうした状況を描いている。
- 24) すでに古典的名著となった会田雄次の『アーロン収容所』には, のんびり暮らす現地の人々と対照的に, 労働を強いられながらも, 倉庫の物品をくすねるなどの活動に忙しい捕虜たちの忙しい日常が描かれていて, 感動的ですからある。
- 25) Studio F. M. B. Bologna (1986), *Grande Atlante Stradale 1:300,000 Italia*.
- 26) ヴィツラーニ, 『年代記』, 第6巻第85章。
- 27) 同第86章。
- 28) 同第7巻第2章, 第4章, 第6章, 第8章など。
- 29) 同第6巻第85章。
- 30) 勿論周辺のコムーネ同様, 12世紀末以来フィレンツェ商人の国外への進出は行われており, ルヌアール(Y. Renouard, *Storia di Firenze*, Tr. F. D. Beccato, Firenze 1907 p. 34)によるとフィレンツェ商人は1209年にシャンパーニュの大市に加わっていたとされている。しかし他のコムーネの場合と同様, それは一部の国際商人の活動であった。13世紀後半のフィレンツェで起

きたのは、一般市民が国際商人・職人化するための障壁が一挙に低くなったことである。

31) S. Terlizzi, op. cit.

32) このことは、この後の故国シエナのゲルフィ党化からも推察できる。シエナではコッレの戦いの後シャルル・ダンジューの代官の干渉でゲルフィ党化が進み、シャルル・ダンジューの強力化を望まぬ教皇庁の干渉や、ギベッリーニ党の巻き返しにもかかわらず、1287年には親ゲルフィ党勢力による九人委員会の政権が樹立され、1355年まで続いた。この政権の下で、シエナは文化の最盛期を迎えている。

33) J. M. Najemy, op. cit., p. 75.

34) 注18)の資料集では、シエナのボンシニョーリやサリンペーニ、ピストイアのクラレンティやジェラルディーニ、後にはルッカのバックージなどが巨額の資金を扱い、フィレンツェのフレスコバルディ、スピッリアーティ、スカーラなどの扱う金額はそれほど大きくない。安全通行証から推定される企業の規模も明らかにシエナやピストイアの方が大きい。しかし小規模な企業や職人などが大挙してナポリに進出したことが、次の世代以降の繁栄につながったものと思われる。拙著、『敗戦が……』の第三章第二節、160ページ以下参照。

35) 拙著、第二章第四節で記したが、シャルル・ダンジューは計略によってこの戦いで薄氷の勝利を得たとされる。兵力そのものはコンラディンの方が上回っていた。

36) 注31)の資料集によると、ナポリ王国とトスカーナ商人の契約の内、職人や写字生など少額の取引を行っているのは大部分フィレンツェ人である。拙著、166ページ。

37) 市民進出によるフィレンツェ社会の変化については、拙著、175ページ以下。ポナッコルソ・ピッティの『家族年代記』にフィレンツェの青年の赤裸々な外国体験が伝えられている。

38) ヴィッラーニは、『年代記』第6巻のいくつかの章でプリーモ・ポポロ時代のフィレンツェ人は質実剛健で愛国心に富むんでいたと称賛しているのに対して、AA. VV., *Florentine Studies; Politics and Society in Renaissance Florence*, edited by Nicolai Rubinstein, London 1986 所収の, C. T. Davis, 'Il buon tempo antico' は、彼は「古き良き時代」というトポスに基づいて同時

「モンタペルティ現象」試論

代人に説教しているのだから、ヴィッラーニの言葉を文字どおり受け取るのは危険だと警告している。しかしすでに見たような大きな変化を体験していたフィレンツェでは、プリーモ・ポポロ時代とはメンタリティが大いに異なっているけれども決して意外ではない。ダンテの詩句でも高慢の狂気から貪欲の狂気変わったと歌われている。愛国心や質実剛健に対して拒絶反応を起こしやすい現代の研究者特有のシニシズムから、デイヴィスはプリーモ・ポポロ時代の気風を解釈し直しているようだが、すでに見た様々な事実から実際に大きな変化、つまりモンタペルティ現象が起きていたことが分かるはずである。

- 39) S. Raveggi, M. Tarassi, D. Medici, P. Parenti, *GHIBELLINI, GUELF, E POPOLO GRASSO: I DETENTORI DEL POTERE POLITICO A FIRENZE NELLA SECONDA METÀ DEL DUGENTO*, Firenze 1978 に収められた, Raveggi の論文, *Il Regime Ghibellino*, p. 15.
- 40) 宮地正人編, 日本史, 東京 2008, の宮地氏自身が執筆した第11章 敗戦から経済大国へ, 497ページ。
- 41) 中国引き揚げ漫画家の会編, ボクの満州 漫画家たちの敗戦体験, 東京 1995。この本は亜紀書房から刊行されている。
- 42) 同書の42ページの赤塚不二夫の文章と, 座談会の225ページ。

第三章

- 1) カルタゴ側から描いているのは, 森本哲郎, ある通商国家の興亡——カルタゴの遺書, 東京 1989, 特に189-206ページの「奇跡の経済復興」。ローマ側からは, 塩野七生, ローマ人の物語Ⅱ ハンニバル戦記, 東京 1993, 第九章 カルタゴ滅亡など。
- 2) ただしすでに見たとおり, 敗戦が滅亡につながる前近代の戦争または現代においても前近代的国家相手の戦争に関しては, こうした論理は成り立ちにくい。
- 3) Dino Compagni, *Cronica delle cose occorrenti ne' tempi suoi* には, ムラトーリの R. I. S., IX に収録されて以来いろいろな版がある。『白派と黒派』は, I. Del Lungo, *Da Bonifacio VIII ad Arrigo VII*, Milano 1889 として刊行されたが, 後に増補改訂されて, *I Bianchi e i Neri* と改題された。
- 4) 以上の経過はコンパーニの『年代記』の後半の要約である。前半ではジャ

- ーノ・デッラ・ベッラがリーダーとなって、閥族を市政から排除することを決めた「正義の規定」の成立までとそのジャーノの追放の経緯を記している。
- 5) Davidsohn, op. cit., Vol. IV, III, Cap. I, Bonifacio VIII e Firenze. ボニファティウスの身長は1603年に彼の墓が開かれた時に測定され、192センチだったという。
 - 6) 前章注39) S. Raveggi e altri, op. cit. に収められた, P. Parenti, I MAGNATI, IL LORO POTERE, IL LORO CONFLITTO, p. 316.
 - 7) Ibid., p. 320.
 - 8) 1308年にコルソ・ドナーティを失脚させた市民たちのリーダーはロツソ・デッラ・トーサであり、14世紀末から1402年までフィレンツェがジャンガレアツォ・ヴィスコンティと戦った時のリーダーはマース・デッリ・アルピツィであり、そのアルピツィ家に代わってフィレンツェを支配し、後にその一族の末裔がトスカーナ大公となったのはメディチ家であった。
 - 9) J. M. Najemy, op. cit., p. 90.
 - 10) Ibid., pp. 91-2.
 - 11) ナジェミーによると、シャルル・ド・ヴァロアの軍隊と黒派がフィレンツェに入城したのが1301年11月の初頭で、早くも11月8日には黒派のブリオーレたちが選ばれている。フィリップ四世の宰相ギヨーム・ド・ノガレとコロンナー族がアナーニの屈辱事件を起こしたのは1303年9月8日のことなので、わずか二年で状況は激変した。さらにフィリップの策謀で教皇庁自体が1309年にローマからアヴィニオンに移転した。
 - 12) ヴィツラーニ、『年代記』、第12巻第1章の冒頭の言葉。
 - 13) C. Paoli, Della signoria di Gualtieri duca d' Atene in Firenze, in '*Giornale Storico degli Archivi Toscani*'. Vol. VI, Firenze 1862.
 - 14) 二つの引用はいずれも、J. M. Najemy, op. cit., p. 135.
 - 15) Ibid., pp. 136-7. この記述から見ても、ナジェミーは明らかにすでにマキアヴェッリの『フィレンツェ史』等でこの事件を知り尽くしている人を相手にこの部分を書いていることが分かるが、この事件を銀行家の陰謀として単純化することが妥当かどうかについては疑問を抱かざるを得ない。第一アテネ公を独裁者に祭り上げた銀行家が彼に何を求めていたかは全くさだかではない。そうした具体的な要望も何一つ明らかに示されていない。
 - 16) N. マキアヴェッリの『フィレンツェ史』、第2巻第36節では、アテネ公打

「モンタペルティ現象」試論

- 倒に立ち上がった三つのグループの内、大司教アーニョロ・アッチャイオーリの率いる第一のグループにバルディ、フレスコバルディ、スカーリらそうそうたる銀行家が加わっていたとされている。アッチャイオーリ家自体も大銀行家であった。
- 17) ナジェミーはこの事件をもっぱら経済や階級の側面から見ていて、アテネ公が市民の人気取りに行った行為や残酷非道な振る舞いなどを完全に省略しているが、社会史的に極めて興味深い現象が生じていたのである。その記号論的な意味については拙著『敗戦が……』、第五章第四節参照。
- 18) 1267年にシャルル・ダンジューに限定的に領主権（シニョリア）を委ねたことは、同一君主の下にいる友邦として、ナポリ王国やプロヴァンスなどとの交流に有利に作用したはずで、テルリッツィの資料に見られる職人階級のナポリ進出などにもその影響が認められるのではないだろうか。明らかに君主制に対しても、シャルル・ダンジューに対しても好意を抱いていないダーヴィトゾーンは、いまましい事実として、フィレンツェは当初シャルルを6年と4分の3自分たちの「シニョーレ（領主）」に任命して、彼が派遣するポデスタを受け入れたが、実際にはその2倍の13年間その地位にあったことを認めている。R. Davidsohn, op. cit., Vol. II, P. I, Cap. VII, p. 843.
- 19) 庶民にとっては、ロシアと中国につくか、アメリカにつくか、という二者択一で、学生の多くはアメリカにつくことに抵抗したが、まともな社会人は、マスコミやマルクス主義者の社会主義体制に好意的な宣伝に引っ掛かることはなかった。
- 20) かつてプリーモ・ポポロ時代にはフィレンツェの支配下にあった都市アレツォを中心とするギベッリーニ党勢力相手のこの戦いは、シチリア晩禱事件とシャルル・ダンジュー一世の死に乗じて巻き返しをはかる戦意盛んなギベッリーニ党の中心アレツォの度重なる挑発に応じて行われた戦争だが、フィレンツェはシャルル・ダンジュー二世にフランス軍の援軍を求め、ナルボンヌ伯エムリと老練な補佐官ギョーム・ベルナルを借り受けて、「ナルポーナ・カヴァリエーレ」を鬨の声として戦ったとされている。かなり兵力に差があり、フィレンツェ軍が有利だったにもかかわらず、アレツォ軍の攻勢が続き、コルス・ドナーティが軍規に反して行った奇襲のおかげで薄氷の勝利を得た。この時フィレンツェ側は1600（内600がフィレンツェ人）の騎士と10000の歩兵を動員したとされ、かつての市民軍が一時的に復活した

- かに見えたが、フランス騎士団に依存するその戦い方は大きく変化していた。
- 21) ヴィッラーニ、『年代記』、第8巻第2章。
 - 22) ジョン・ダワー、前掲書などに、占領軍によって「日本国憲法」が用意され、日本人に提供されて、日本人がこれを採用した経緯が記されている。この著書はタイトルからして挑発的であり、当然見解の相違はあり得るが、憲法採用などの経緯は基本的に事実に近いものと思われる。
 - 23) マキアヴェッリは、『フィレンツェ史』、第一巻第39節を始め多くの箇所、フィレンツェの軍事的失態を指摘する。ただしそれは改善すべき点の指摘などといった建設的なものというよりも、失敗を嘲笑していると言った方が実態に近そうである。クエンティン・スキナー（塚田富治訳）、マキアヴェッリ——自由の哲学者、東京 1991、147ページ参照。またこうした不満から、『君主論』や『ローマ史論』や『戦術論』が生まれたことは明らかである。

An Essay on the Montaperti Phenomenon

Yoshiaki YONEYAMA

In my book ‘The Defeat that Changed Medieval Florence’, I showed that the defeat of the Florentine army by Siena at Montaperti played an important part in the subsequent cultural and economical development of Florence, and that a similar phenomenon happened after the Second World War in Japan, Germany, and Italy; I called this the ‘Montaperti Phenomenon’.

J. M. Najemy’s ‘A History of Florence 1250-1575’ (2006) also admitted that the flowering of both Florentine culture and its economy happened almost simultaneously in the late half of the 13th century, but did not recognize the importance of the defeat of Montaperti. In this essay, therefore, I examine points of similarity between medieval Florence and postwar Japan not only to explain the phenomenon more clearly, but also to demonstrate the insufficiency of Najemy’s account of Medieval Florence.

Medieval Florence and modern Japan had three principal points in common: first, they were militant and aggressive states which had fought for years prior to their decisive defeat; second, they each enjoyed an advantageous position in the international arena following their defeat; and third, the struggle to overcome postwar burdens tempered their people, leading them to their final success.

The curious events of the 14th century in Florence, such as the conflict between White and Black and the reign of the Duke of Athens, cannot be understood without a comprehension of the Montaperti Phenomenon. However, the phenomenon has gone largely unnoticed until now because in the pre-modern world victors could treat defeated nations arbitrarily, leaving them no chance

to recover. As a result, the aforementioned three points of similarity rarely came together until the advent of the modern world, and the influence of the defeat lingered for a long time.